
Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

星野由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

【Nコード】

N7429X

【作者名】

星野由羽

【あらすじ】

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

A、無理だろ。無理無理。

あたしはただの乙女ゲーオタクのひきこもり、保崎 秀名。高校に行かずに毎日ひきこもりライフを送っていたら、何と急に異世界に召喚された！？

その理由が「六人の愛しの息子たちに、本当に恋愛を教えてやってくれ」だって。

一応乙女ゲーの達人なので、すぐに元の世界に戻れると思ってけど、
なんだかその息子たちがめっちゃ性悪！

女好き、天然悪男、冷血人間 e t c ……。

あたし、いつ戻れるのだろうか……。っていうか、本当に戻れるの
か……。？

第一の問い「何が違うのか？」

ああ、何か違うな。

あたしは、目を覚ます前から、違和感に気が付いていた。

背後でざわめく木々の声、ほつぺたに感じる、葉っぱの冷たい感触。遠くで鳴く、何かの獣の鳴き声。

あたしは、自問自答してみる。

Q、何が違うのか？

A、世界も、自分も、何もかも。

——数時間前——

「……っし……」

お菓子のゴミ袋が散乱している部屋の中で、少女の声は響く。

——なんて、かつこいい書き出しで始めてみました。

あたしの名前は保崎^{ほみき} 秀名^{ひいな}。男でも女でもとれる名前だけど、あ

たしは一人称からわかる通り、女だ。

今は引きこもり中。うつとおしい前髪を頭の上でくくり、左右にたれてくる短めの後ろ髪は、ピン止めでピタツと止める。女子力？何それ食べ物？ 状態の、思いつき「腐女子」の高校生でーす。そんなあたしは、目の前にコンパクトな、年季が入っているゲーム機を手に取り、「男子攻略」中。

画面の向こうには、机が散らばる教室に、うつとりするような金髪を持った、生徒会長があたしに向かって話しかける。

生徒会長：『俺、生徒会あつたんだけど……何の用？』

話の途中で頭を掻く、リアルぶりだ。

あたしは動揺する様子を見せずに、「彼」に向かって言葉を投げつける。

ヒナ：『別に……よっ、用なんてたいそうなものじゃないんだけど、聞きたそうだから言っただけっ！』

ふっ、「彼」のタイプはツンデレキャラだ。あたしはその役を演じるだけ。

すると、予想通りに顔を赤くし、頬を掻く「彼」。

あたしはその反応にガツポーズをし、「黙る」のコマンドを選ぶ。

「どんなセリフでも来い……ま、その言葉は決まってるけど」

あたしが身構えると、思い通りの言葉が返ってきた。

生徒会長：『あのさ……いきなりだけど……ずっと、お前のこと、いいなって、思ってたんだ……その、っ、付き合ってくれないか……？』

来たーっ！

「全コンプリートっ！ よし、このゲーム終わり」

あたしは、画面の向こうの「彼」に目もくれず、セーブもせず、電源を切った。

ぱ、と黒い闇が広がる。その画面に、頭がぼさばさで、中学校時代のジャージを着たあたしが映った。

高校に、入学式合わせて三日しか行っていない、ダサいあたし。
おしゃれな雑誌なんて買ったことがない、流行に乗り遅れているあ
たし。恋愛ゲームの達人だけど、実際の恋愛なんてしたことがない
あたし。

「……はっ、次のゲーム！ 昨日発売だった新作の！ やろう、や
ろうー！」

下がってきたテンションを上げ、パチリ、と電源を入れた、次の
瞬間。

ゲーム機の画面が、ぐにやりと曲がる。

「え？ まさか、パグ？」

叩いてみたが、治る感じはしない。

それどころか、波紋は広がり、ついには気味が悪くて手を放す。
しかし、黒い渦は、二次元を超え、三次元に突入。
その黒い渦に、あたしの手が呑み込まれる。

——それが、あたしの見た、この世界の最期だった——

「ってことは、死んだのかな、あたし」

目を開けずに呟いてみる。

もちろん誰も答えない、と、思ったその時——、

「あの一……生きていますか一……？」

おどおどした、腰が低そうな男性の声が聞こえてきた。

第二の問い「この二人はなんなのか？」

「あの……聞こえていますかー……？」

その声は、徐々に声が低くなっていき、ざっざっ、という後退する音も聞こえてきた。

気配からして察するしかないのだが。

「あのお……お願いですから聞こえていたら返事してえっ！」

ただだ、とこちらに走ってくる音とともに、耳元で怒鳴られる。

「聞いているわばか野郎ーっ！ 鼓膜敗れるだろーっ！」

あたしもむくりと起き上がり、耳元で怒鳴ってやった。

ひえっ、と声を上げ、小動物のように縮こまる、例の人物。

「お願いですから、大声を出さないでください……」

ビビりながらそういうやつのは、結構、

「イケメンだ……」

そう、日本人離れた高い鼻、ややタレ気味の目、ふんわりとやわらかそうな唇、ふわふわなほっぺ。それらが絶妙なバランスでおかれている。

て、天から舞い降りたエンジェルやーっ！

そう。短めの紙はくるくるにまかれているし、白を基調とした、ナポレオンのような洋服。ほっそりとした手足は、あたしが力を入

れるとすぐに折れそう。

「あの、テイクアウトで！」

「はあ……？」

いきなり怒鳴ったあたしに、はてなマークを出す、エンジェル。
ああ、その困った顔もかわいい……。

あたしが、エンジェルの顔をじとーっといっていると、後ろからぱこつ、となにかで頭を叩かれた。

意外と強烈……。

「いったー……誰よ、殴ったのはっ！」

あたしが後ろを向くと、そこには、手に凶器を持った、殺人鬼――。

ではなく、

「またもやーっ!？」

黒髪の美少年が立っていた。

エンジェルの子と顔だちはよく似ている。黒髪も、ストレートではなく、毛先が少し、くるっと回っている。釣り目がちな瞳は、闇のような黒。こっちのイケメンは、黒を基調とした、エンジェルと同じつくりの服を着ている。

そんな彼は、あたしを不審そうにじーっと見て、こういった。

「このブス、処刑してもいいか？」

ふざけるなーっ！

「ああもつ、やっぱそう来たか、乙女ゲーの定番、冷血人間っ！」

うん、黒髪と来たらそれだよね。……じゃなくて！

「は？ 何が言いたいんだ？ おい、ジェル。この女を連れて行け」

そついわれ、はひっ！？ と肩を震わすエンジェル君。いや、ジェル君。

名前もかわいいんだから。

「あの、お兄様……本当に、連れて行くんですか……？」

「そうだ。おい、立て。動けないともなると、お前はデブでブスと
いうことになるぞ」

そついいながらも、腕を引いてあたしが立つお手伝い。

高感度、二十up。

「早く連れて行くぞ。おう、右のほう持て」

「は、はい」

二人のイケメンに挟まれ、あたしはきれいな緑色の草の上に、赤い鼻血をまき散らしました……。

Q、この二人はなんなのか。

A、この後わかります。

「いやあー、はっはっは。まさか森で倒れてしまつとはね。あっはっは、はっはー！」

豪快に笑うおじさんの前で、あたしは正座をしています。

下にはふかふかの、赤いカーペット。上にはキラキラのシャンデリア。そこには、メイドさんがずらあーっ。ついでに兵隊さんもずらあー。

目の前に座っているおじさんは、豪華な、金色の椅子に足を組んで座り、頭には大きな冠。真っ赤なマントがよく目立つ。そして、服装は、王様風。

いやあ、カボチャパンツはいているおじさん、生きているうちに拝見できたよ。よかったよかった。

「ってじゃなくてーっ！」

「誰に言っているのかね？」

「違います、違うんですすみませんっ！」

「うるせーよ黙れブス」

あたしの隣に立っている、あの冷血人間が言葉という名の矢を放つ。

クリーンヒット！

胸を抑え、うずくまるあたしに、おじさんは、「これ、レイ」と、まったくとげのない叱り方。

甘やかすなよ！

「っていうか、誰なんですか、あなた。あたし、まったく状況読めていないんですけど」

「読めなくて当たり前です」

そういつてにこりと近づいてきたのは、ピンク色のロリータを着た女性。

……いや、メイド服を着た、女性。

ふりふりのレースは裾だけでなく、様々なところに使われており、ワンポイントの花は、巨大だ。

「あなたは这个世界に召喚されたのですよ、保崎さま」

にこりと笑う、彼女にノックアウト。

おかしいなあ……あたしに百合要素は一切なかったはずだけど。

「それで……？ あたしは何のためにここに来たんですか？」

他にも聞きたいことはいっぱいあるが、まずはこれが最優先だ。

すると、メイドさんに代わって、おじさんが、椅子から立ち上がり、大声であたしに言った。

「保崎 秀名。おぬしはこれから、最愛の息子たちのハートをゲットするのだッ！」

……保崎 秀名。なぜか異世界で、逆ハーレムづくりを強制されました……。

第三の問い「ハーレムを作ることができるのか？」（前書き）

予想以上の反響に驚きです><

読んでくださった方、感想と評価をつけていただくと踊ります。画面の前で^^

第三の問い「ハーレムを作ることができるのか？」

Q、王子のハートをゲットし、ハーレムを作ることができるのか？

A、（一番目の答え）さあ、わかりませんね！

「第一王子のクロード様です」

あたしは今、豪華なあるドアの前に、例のメイドさんと一緒に立っています。

紅い、蛇がモチーフらしいドア。宝石やら金やらがたくさん、これでもかといっている。

「……なんで、こうなったんだっけ……そうだ、数分前だ……」

あたしの、現実逃避から成る回想が、始まった――。

「え？　なんで逆ハーレムづくり……？」

思わずつぶやいたけど、それは、おじさんに掴みかかろうとしたレイさんにかき消された。

「なんなんですか、父上っ！　聞いておりませんよ！」

「うん、そりゃそうだろうね。言っていないんだもん」

「言えつつてんだよバカおやじ！　なんでこんなちんちくりんに恋心抱かなきゃいけないんだよ！」

「そうか？ お前にぴったりだとおも……」

「お前にぴったりだよ！ 四十五のひげおやじになあ！」

いきなりの父と息子のけなしあい…… っていうかレイさんの一方的な悪口を聞きながら、あたしの頭も混乱。

「えの、あつと、なんであたしを選んだんですか？ 他にもいい人いるじゃないですか。美人さんなんてごろごろいますよ」

「そうだ！ 仮にも美人以外の人でも、こいつのレベルはないだろう、こいつは！」

何故に二度言った！

「ふ。レイは人を見る目がないな。何を隠そうこの秀名さんは！」

お、何々？

「恋愛ゲームの達人なのだ！」

「オタクじゃないですか。ただの」

ふん、あたしはその言葉を何年聞いてきたと思っているのだ！
もうその言葉には慣れっこだもんねー！

「ただのオタクじゃないぞ！ なんと、この人は恋愛経験ゼロだ！」
「言うなーーーーっ！」

あたしは、おじさんの顔に右ストレートをお見舞い。
その途端、横にずらーあつと並んだ兵隊さんが、あたしのど元に、長い槍を押さえつける。

ほんの数ミリ動いただけで、あたしののどは確実に切り裂けるだ

ろっ。

「……なんのまねですか……」

「それはこちらのセリフじゃないのか」

ちゃっ、と槍を、強く押し付ける。

「王になんてことを」

王？ この人王なの？

「まあまあ、対していたくないから気にしないでくれ」

赤くなつた頬を抑えながら、ニコニコ笑つて言うおじさん。いや、王。

よーゆーそんな口調だが、目は涙がたまっていて、痛そうなのが手に取るようにわかる。

「……すみませんでした……」

とりあえず謝っておいて、話の続きに戻る。

「……それで、そのあたしが逆ハーを作る理由は……？」

「そんなの決まっているだろう！ 息子が恋愛をしたことがないからだー!!」

……何がどう決まっているのかわからない……。

「とにかくだ。女癖悪いやつもいる、妙な趣味を持っているやつもいる、女嫌いの奴もいる、とにかく恋愛に無縁の奴らがそろってい

る」

ええ。特にレイなんか、逆にきらわれそうですよね。

「特定に俺の名前を言っているのは何か意図的なものか……？」

「そうに決まっているじゃないですか」

バチバチを火花を散らすあたしたちの間に、例のメイドさんが間に入る。

「まあまあ。とにかく、詳しい質問はあとで、長男、そして第一王子のクロード様にあってみませんか？」

回想終了。

短かった……もう少し現実逃避したい……。

「では、入りましょう」

メイドさんが、ドアを開けた。

その先には――。

「こんにちは。君が、秀名ちゃんだね？」

あたしのジャージ姿を目にしても驚かない、というか逆の反応をする、長髪の男性がいた。

――あたしは、この人の心も手に入れなくちゃいけないのか……。

第四の問い「長男登場に、自信はつくのか？」

Q、長男登場に、自信はつくのか？

A、少し……いや、結構、無理。

「秀名ちゃん、よろしくね。僕は長男、そして第一王子のクロードだよ」

にこりと手を差し出してくるのは、いかにもチャラそうな、男性。百七十はゆうに超えているであろう長身に、甘いマスク。茶色い長髪。

ブラウンを基調とした、例の服を着ている。

いい年して、兄弟そろって色違いの服を着ているのにツッコミたくなるが、そこはスルーしておこう。

「では、私はこれで」

頭を下げるメイドさんに、「なりきってるー」と一声かけ、クロードさんは、見送る。

あれ？ あたしは遊び人だと思っていただけ、そうでもないのかも。だって、普通は手ぐらい握るキャラが多いのに。

すると、あたしは今、自分が置かれている状況に頭が追いついた。目の前には、男の人。そして、妙に目が付くのは、フカフカなベツド。

どんなに鈍感キャラでも、さすがにこれは気が付くだろう。その途端、混乱する頭。

いや、待てよ！？ あたしは女だが、ブスでもあるんだぞ！？

自分が一番わかっていないじゃないか！　ありえない、うん、ありえない。こいつ、いかにもメンクイそうだし。そうだそうだ、ないない、ないないないないない。

混乱してきたあたしの方を、ポンとたたたくクロードさん。

「何々？　俺たち、どうすればいいの？」

「お、お話とかでしょう普通は！　うん、そうですよお話ししましょう！」

あたしの熱が入った声に、クロードさんは首をかしげる。

「ベッドで？」

「違うだろぼけーっ！　初対面の人と話しやすいように椅子というものがあるんだろてめえーっ！　ひと段落飛ばすなバカあーっ！」

落ち着かないあたしの声に、ふっ、と笑うクロードさん。

「椅子、ね。その考えはなかったわー。俺、初対面の人でもゴーだから」

「それはお前だけだーっ！」

ふっ、なんか頭も冷えてきた……よし、落ち着こう私。

ふらふらとおぼつかない足取りで、高価な椅子に近づく。

「お、お話したね。よし、じゃあやりますか」

にこりと笑う、クロード。

あ、さんつけてないけど、まあいいか。

Q、王子のハートをゲットし、ハーレムを作ることができるのか？

A、この人苦手だから、無理かも……。

「俺の趣味はね」

あたしに質問もしないで、さっさと話し始めるクロード。
ああ、こいつヤダ……。

「女の子と遊ぶことー」

爆弾投げてやろうか？

とは言わずに、とりあえず笑っておいた。

ひきつりだす顔。

「ん？　なんか顔面崩壊しているけど、大丈夫かな？」

ニコニコと、罪悪感の感じていなさそうな顔で笑う、クロード。
うつぜえー。

あたしは後ろを向き、思いつきり顔面崩壊——いや、いやな顔を
して、心の中のいろいろな感情を吐き出した。

「どうかしたの？」

何も疑っていなさそうな、純粹な目。

こいつ、何歳だよ。っていうか、女遊びが趣味なのに、なんでこ
いつ、こんな顔ができるわけ？

「いえ。失礼しました」

あたしは笑って、背筋を伸ばす。

「ところで、好きなタイプとか、あるんですか？」

あたしが聞くと、

「女の子全面」

と、答えた。

ぶ、ぶっ殺してえーっ。

「女の子って、イイよね。かわいいし、守りたくなるし」

あれ？ こいつって、あたしが思っているのより、いいやつなのかも。

そう思ったとたん、

「特に体」

あたしはクロードに顔面パンチをお見舞いし、部屋を後にした。
もはや、目的忘れる。

第五の問い「次男登場。恋の予感はあるのか？」（前書き）

拍手ページやいろいろ設置しました♪
クリックお願いします^^

第五の問い「次男登場。恋の予感はあるのか？」

ぷりぷりおこりながら部屋から出てきたあたしを見て、例のメイドが、

「やはり、苦手なタイプでしたか……」

と、苦笑い。

あたしはうん、と激しく同意。

「では、次の部屋に行きましょう。次は次男、第二王子のアシル様です」

アシルかー。いい人だったらいいな。

そんなことを思いながら、一分もたたないうちに、クロードのころの部屋と同じような飾りが付いた、豪華なドアの前についた。

「それでは、行つてらっしゃいませ」

深々とお辞儀をして、あたしを部屋の中までに案内しないようだ。クロードの時と違う扱いに、あたしは疑問を抱く。

「あの、なんで部屋を開けないんですか？」

「わたくしはこの部屋の人——アシル様と、あまりかかわりたくないんです」

かわいらしく、にこりと笑うが、そこに何かただならぬものを感じたあたしは、それ以上の探索をあきらめ、扉を開けた。

「あの……保崎です……」

部屋の奥にいたのは、

「ああ、いらつしゃい」

椅子に座った、クロードよりは小柄な男性。

まず目に付くのは、縁なしのメガネ。その奥の瞳は茶色く、瞳と同じ色の髪は、長髪を後ろで三つ編みにしている。おっとり系のよ
うなオーラで、背後には花が見える。

見た目は大丈夫そうな人だが、油断大敵。警戒せよ。

すると、アシルさんは、すぐに手元の本に目を落とす、第二王子。
本の題名は「Q、猪瀬でハンバーガーは食べれるのか？」。

「……なんか、どこかで聞いたことがあるような題名ですね……」
「この本を知っているのかい？ 略して『猪瀬ハー』だよ。本好き
なら、話も弾みそうだね」

いえ、あたしは大体、ラノベ、しかもハーレムものくらいしか読
みませんから。

と言おうとしたのだが、その隙も与えずに椅子に座るように勧め
る、アシルさん。

「あ、ありがとうございますー。座らせていただきます」

うん、この人はいい人だ。

にしても、こんなに紳士的なら、何がいけないのかなー……。

と、思考をしていると、廊下からだだっという音と、メイドさ
んの「いけませんッ！」という声がした。

「!? なんでしょうか」

さあ、とアシルさんは首をかしげる。

その時、盛大な音を立て、気温は結構低いのに、半分露出しているミニドレスを着た、ケバイ女の人が入ってきた。

その人は、あたしの顔を見ると、たつぷり口紅をつけている唇の端を、ぐ、としたに下げ、

「なんなのこの小娘！」

と、怒鳴った。

「はい？ あたしは保崎 秀名です」

「ホザキい？ 変な名前しやがって。あたしのアシル様に、近づくな、糞アマ！」

……あたし、悪いことなんてしていないと思うんだけどな……。

いや、待てよ。

お母さんの財布からこつそり五百円パクツたのがばれた！？ いや、あの時は五百円だからいいやとか思っていたけど、もはや怨念が異世界まで来ちゃうとは思わなかったよ。

「お母さん、ごめんなさい……お母さんにとって五百円がそんなに重いものだとは思いませんでした……ですから、ちゃんと成仏して……」

急に語りだしたあたしに、お母さん（らしき人）は、ひくつ、と顔を引きつらせる。

そして、違うわよっ！ と、唾がかかりそうな勢いで怒鳴ってきた。

「あんだ、アシル様を横取りしようとしているのね！？ わかったわ。でも、アシル様は私のもの——」

「え？ 待って。君、誰だっけ」

ぴつきーん。

空気が、張りつめた。

すべてはアシルさんの一言によって……。

「ああ、思い出した。君、街中で、いつも僕に焦げたクッキーをくれる人だね。真心はこもっているけど、正直言って、それなら下級貴族の娘さんたちがいつも売っている、屋台のクッキーのほうがましだな」

すると、その時。

ぱあん。

女の人が、アシルさんの頬に、平手打ち。

「そんなにひどい人だとは思わなかったわ！ もういい、帰ります」

ミニのスカートを翻し、彼女は廊下の奥へと颯爽と消えて行った。

「……あの、大丈夫ですか……？」

口の端を赤くして、頬を抑えているアシルさんに駆け寄り、恐る恐る顔をのぞく。

まさか、この人もクロードみたいな遊び人……？ いや、悪女、
じゃなくて、悪男？

すると、彼の口から、とんでもない一言が吐き出された。

「どうしたんだろうか……僕は本当のことを言っただけなのに……」

ああそうか。こいつは、悪男じゃない。

天然の、悪男なんだ……。

「天然キャラ、撲滅しろっ！」

あたしはアシルさんに、さっきの人よりも大きく音を立てた平手
打ちを食らわし、部屋を出た。

Q、次男登場。恋の予感はあるのか？

A、絶対、む・り！

第六の問い「三男は、あいつなんだけど、どうか？」

「あっちゃー……すみません、突然、意味不明な乱入者を入れてしまつて」

手を振りながら出てきたあたしに、メイドさんは苦笑い。
どうやら、あの平手打ちの音は、そこまで届いたみたいだ。

「さて、次の部屋に入る前に、着替えてもらえないでしょうか」

小首をかわいらしく傾げ、質問をするメイドさん。

「え？　なんでですか？」

「実は、お伝えしたくはないのですが、次の人物、三男、第三王子は、あなたとともに仲の悪い——あの人なんですよね」

その言葉で、ぴつきーんとくる。

中の悪い——つまり、あいつだ。冷血人間キャラ、黒髪の、いやあーなやつ。

「その人が、ジャージで来させるなど、おっしゃっていたので、着替えていただこうかと」

うん、あたしも登場草々で怒鳴られるのはまっぴらごめんだ。
というわけで、着替えることに。

「ドレスとメイド服。今用意できるのはこれくらいでしたが、どちらがよろしいでしょうか？」

そ、それは究極の選択……。

あたしはどっちも似合わないのは自分が一番わかっているし、着替えてメイクしたら美人さんになる設定なんて、あの作者が作るわけないし。

でも、メイド服で行ったら「ふざけているのか……？」とか言われそうだし。

「じゃあ、ドレスで……」

ああ、ドレスなんて着るの、七五三以来だなあ……。

Q、三男は、あいつなんだけど、どうか？

A、答えるまでもない。

「失礼しまーす……」

ドレスなんて着たことなかったから、数十分も苦勞して、ようやく三男と会うことに。

そこで待っていたのは、予想どおりあいつだ。

「遅い！ 何やっていたんだ！」

腕時計を見ながら、怒鳴り散らす黒髪のイケメン。
レイだ。

「あんたのお望み通り、着替えてきたんですうー。文句言う筋合いはありませんー」

あたしのやる気のなさそうな答えに、レイはさっそく、

「ふん。お前にドレスなんか、もったいないな。豚の着ぐるみでもよかつたんだぞ？　お似合いで」

悪口。

ふん、そっちがそういうつもりなら、こっちだって言ってるよ。

「あんただって、人のこと言えないんじゃないのー？　あんたのお兄ちゃんたち、あたしが来たら椅子進めてくれたけどー？」

「あいにく、この椅子は繊細でな。お前が乗ったら壊れそうなんだ」「ああそう。じゃあ、あんたが乗っても壊れるわね」

「ほめ言葉をどうも。こっちは鍛えているんで、お前とは重さの種類が違うんだよ」

「あらそう。じゃあ、一生、その椅子には座らないように気を付けてね」

おほほほ、と口元に手を開け、上品な笑い。

レイも、はっはっは、と、腰に手を当て、寛大な笑い。

ところが、その笑い合戦も、すぐに尽きる。

「おら、表でろやごらあ！　この俺様に何言いまくってんだおらあ！」

「そっちこそ出なさいよ！　このあたしに、何回悪口行ったら気が済むわけ！？」

バチバチと、火花を散らす。

すると、不穏な空気を察したのか、メイドさんが部屋の中に入ってきた。

「レイ様っ！？ 保崎さま！？ おやめください！」

あたしとレイの間に入る。

その途端、レイが「おまえ、ようやるよな」と、不思議な一言を発する。

するとメイドさんは、少し待っていてください、と、黒い笑みとともに言い残し、レイを部屋の隅に連れ込む。

何やらこそそと話し合っているようだ。会話の内容は気になったが、プライバシーの侵害になりそうなので、あたしは椅子に座って待機。

数分後、げっそりしたレイと、生き生きとしたメイドさんが、あたしのもとに来た。

「お待たせいたしました。では、話の続きを」

一礼し、スカートを大きくひるがえし、ほれぼれするような歩き方で部屋を出て行った。

残されたのは、あたしと、魂を吸い取られたかのようなレイだけ。

「……あのー……大丈夫ですか……？」

「ダメだ。誰でもいい、助ける」

そういつて、手を取ってきたレイ。

あたしはいきなりの行動に、悲鳴を上げ、

「変態っ！ 触るなボケっ！」

優雅に平手打ちではなく、得意な右ストレートを食らわして、あたしは、メイドさんのように、部屋を後にした。

にしても、あのメイドさんの正体って……？

第七の問い「四男五男は最悪か？」

「メイドさん、あのー……」

あたしは、メイドさんに追いつき、裾を引っ張る。

ふりふりの繊細なレースを引っ張るのは気が引けたが、まあ、仕方がない。

すると、レースが破けるので、と、表情にだし、さりげなくあたしの手を外す。

「なんででしょう？ あ、次は双子なので、四男と五男、一気にいきますよ」

「いや、そういうことじゃなくて。あなたの名前とか、そういえば知らなかったなーって」

あたしが聞くと、にこりと、かわいらしい顔で、答えた。

「これからわかりますよ。ご心配なく」

それだけ言うと、あたしの背中を押した。

目の前には、ドア。

「ひ、開いていないですーっ！」

強い力で押されたので、あたしはドアに激突——しなかった。ギリギリのところで開き、目の前に、白い腕が広がった。そのまま、ふわりと誰かに抱きかかえられる。

「はい、捕獲ー」

「え、何やってるの……怖い怖い、ヤダヤダ連れてこないでーっ！」

捕獲とか言ってる、もはや人間扱いをしてくれない人は、ストレ

ートの金髪。青い目。

あたしをみんなの嫌われ者扱いのようにしている、失礼な人はくるくるの巻き毛。緑色の目。

巻き毛さんのほうは、森であった、エンジェル——いや、ジェル君だ。

じゃあ、もう一人は……？

「初めましてー。ジェルのことは知っているんだよね。僕、ジェルの兄、シエルだよ」

あらー。ジェル君と同じく、かわいいキャラですかー？

と思つたら、隣にいたジェル君が忠告。

「シエル、かわいいキャラじゃないよ。小悪魔だから」

え？ 何それ。

そう思っていると、ぎゅ、とシエル君が、きつく抱きついてきた。

「わわわ、何々っ！？」

慌てていると、衝撃の一言を繰り出した。

「うん、Cカップかな。まあまあだね。僕の範疇にはないけど」

死ねーっ！

Q、四男五男は最悪ですか？

A、ジェル君は分からないけど、シエル君は女子の敵。死んだほうがいいと思う。というかいつそのこと死ね！

いきなり、みぞおちに強烈なパンチを発動したあたしに、ジェル君はひい、と部屋の隅に逃げる。

「はー、はーっ。死ね死ね死ね死ね……」

あたしは彼の横にしゃがみ、お経を唱える。

その光景を見て、逃げようと確信したらしいジェル君は、壁に沿ってカニ歩きをし、ドアに向かってダツシュ。

あたしはジェル君より、自分の感情を吐き出すことが最優先なので、そちらをちらりと見ただけで、再び作業再開。

「もうやってやれないよーっ！　これだから女の人って苦手なんだーっ！」

泣き叫びながらドアを出ていくジェル君に、キャラ確定。
こいつは女嫌いキャラだ。

「かわいい顔してるのに、なんつー性格だ、この兄弟」

ため息と自分の中にある黒い気持ちを吐き出した時、廊下から悲鳴が聞こえてきた。

「はっ！　あれはジェル君の声！　どうしたのかな。まさか、このお話はミステリーなの！？」

ミステリーは嫌いじゃないあたしが、胸を躍らせて悲鳴の聞こえたところに行くと、ジェル君と、その襟元をつかんで黒い笑みを浮かべているメイドさんがいた。

「あの、何かあったんですか！？ まさか、さっ、殺人とか――」

「いえ。違いますよ。彼はただ、失神しているだけです。さて、連れて行ってあげてください」

そういつて、名残惜しそうにジェル君を渡すメイドさん。
な、何があったんだ……。

「あ、目覚めたときに、悲鳴を上げると思われますが気にしないでください。彼はほんつとくに女性が苦手なんですよ」

おほほほ、と口に手を当てて優雅な笑い方をする。

「そうっばいですよー。わかりました、戻しておきます。

あたしはジェル君を遠慮なく引きずりながら、部屋に戻って行っ
た。

部屋の中には、シエルがうなされながら左右にごろごろとこめい
ていた。

Q、四男五男は最悪ですか？

A、yes。シエル君に加え、ジェル君も、たぶん最悪です。

「う……」

しばらくしていると、ジェル君の意識が戻ったようだ。

うん、これもあたしがベットに運んでおいたおかげかな。

いいことをした、みたいな顔でジェル君に声をかけると――、

「うつわあああああっ!? ベットに運ばれたああああー――
ーっ!」

と、世界の終りみたいな叫び声をあげられたので、あたしは――、

「死ね糞野郎っ! 女子の何が悪い!」

近くにあつた花瓶を投げつけた。

うん、悲鳴は上がったけど、すこし的をそらしてあげたから、心配はない。

第八の問い「六男は、まともな人か？」

さて、最後だ。

これで全員との面談が終わる。あとは恋愛ゲーと同じ要領で攻略していけば大丈夫だろ。

にしても、遊び人、天然悪男、冷血人間、小悪魔、女嫌いとしろったけど、あとは何が来るんだろう……。

は、まさか、ムツツリ！？ ごめん、あたしあれには萌えない体質なんだ。そうだったら、逃げよう。

そんなことを考えている時間、約二十秒。その間、上を見てボーっと突っ立っていたわけだから、メイドさんがあわてて声をかけるのもわかるよ。

でもさ、お願いだから顔をつねって、現実には呼ぼうとしないで……。

「い、いはいですメイドはん」

「痛くないですよ。最後なんですからつきちつとなさってください」

あれ、なんか目の色変わったよね。なんでだろう。

すると、メイドさんが、部屋のドアを開け、中に入って行った。これまでは違う行動に、首をかしげる。

そんなことをしていると、メイドさんが早くしてください、と言ってせかすので、慌てて中に入って行った。

「はいはい、入りましたよメイドさん。こんにちは、保崎ですー……
…って、ええっ!？」

中にいたのは、メイド服を豪快に脱いでいる、メイドさん。

ああ、文章的にも頭的にも混乱を招きそう。

「あのっ！ 何があつたんですか脱がないでくださいメイドさん！
ああ、六男が悪いことをしたとかそういう感じですね！ わかり
ました、あたしがぼっこぼこにしてやりますよ。さあ、出てきなさい、女の敵、魔性の六男！」

「あのさあ、うっざいんだけど。さっきから兄様の顔やらみぞおち
やらを殴っててさ」

声がした。

小鳥のさえずりのように、透き通る、きれいな声。その声は、複雑なつくりのメイド服に苦戦している、あのメイドさんのほうからした。

「……え……？」

きょとんとしていると、上半身は脱げたようで、安心したメイドさんが、こちらを向いた。

「僕。僕がその声発してるの。わかる？」

眉をひそめ、どちらかというと睨みつけるような視線を送ってくる。

その人物は、先ほどまで、ロリータといったほうがいい、ふりふりのメイド服を着ていた、メイドさん——と、思われていた人物。

「僕が六男。第六王子の、ソウシ。兄さんたちにした分、返してあげるから覚悟しておいてね」

ああ、こいつは、最近人気が出てきたキャラ——。
女装男子キャラだ……。

Q、六男は、まともな人か？

A、まともじゃないです。一番。

「と、言うわけで。しっかり、歯を食いしばってね」

いやいやいや、上に一枚着てください、下半身スカートって異様な光景です。っていうかいつの間にもイク落としたんですか。って
いうかなんでそんなにブラコンーっ！？

「失敬な。僕はブラコンなんかじゃない。男の人が好きなだけだ！」

堂々と、高らかに宣言したソウシに、あたしは思わず冷たい目を
向ける。

空気が凍り付いてきたと思うが、そんなこと微塵も気にしていない
スイッチが入ったのか、彼は顔を少し赤くし、それでも声のトーンを落
とさずに演説。

「男の人っていいだろう……あの体！」

あたしは近くのクッションを投げつけた。
それを、少し体を動かし、かわす。
くそう、何て奴だ……！

「あの低い声……特に、クロードがいいと思うよ……」

ああ、こいつは腐っているー！

こいつも逆ハーレムの対象になっているのがヤダー！ こいつに好かれるなら、全国のムツツリさんに好かれた方がマシだー！
すると、その叫びを、思わず声に出ていたのか、表情に出ていたのかは知らないが、とにかく察知したソウシは、む、と唇を尖らせる。

「なんだよ。ムツツリが嫌いとか、贅沢なこと言ってるんじゃないよ」「え、待って、説教モードに入りそう！ やだ！ こいつに説教されるとかマジヤダ！ 幼稚園児にケータイの使い方教わるほうがまだましだー！」

「何言ってるんだよ。そんなことしないって」

机の上に重ねてあったＴシャツに手を伸ばし、ソウシはくすりと笑う。

「まあ、今日は夜にレイお兄様と逢引する約束したからだけだね」

あ、そうか、あの時、レイが死んだような顔していたのはこのせいか。まあ、このホモ具合なら、何されるかわかんないね。

あたしは心の中でだけど、レイに合掌。

無事に、夜を過ごしてくれ。

「とにかく、僕は愛するお兄様——いや、男の人が、君に楽々攻略されるのが嫌なの。僕も逆ハーのメンバーに入っているけど、君には協力しない。いや、むしろ邪魔をする」

その瞳に、黒い光が宿ったのを、あたしは見逃さなかった。

「だから、僕は君に恋なんてしない。いや、できない。だって女だもん」

「うわー、なんだか男が言わない言葉ランキングの十位以内には入りそうなお言葉。あ、後半部分だけね。」

「だから、君の逆ハートの計画は失敗に終わるだろうね。ああ、それと忠告。もし、お兄様一人でも君に惚れるなら、君を葬むるのに手段を択ばないからね。覚悟しておいてよ。」

着替え終わったソウシは、あたしをまるで恋敵のように見ている。いや、あたし、あんただけじゃなくて、全員に好かれる自信がないんですけど!?

「そんなこと言って、本当はバリバリやる気なくせに。やだやだ、女の人ってやだ。」

「ああもうウザいなあ。あたしが何か言うことに突っかかってくんのやめてよ! この、女装ホモ男!」

「ああ? 女装はオプシオン。男の人に好かれるための手段!」

「それがキモいって言うてんの! 女嫌いキャラはすでにいるんだし、やめたら? そのキャラ」

「やめるもんかよ。お前こそ自分のキャラはなんなんだよ。言ってみろよ。」

「ふん、オタク女子。これで結構コケコッコー」

「古いんだよギャグが!」

「新しいギャグないから仕方ないじゃん!」

数分、そのような低レベルののしり合いをしたのち、ソウシが折れて、部屋を出て行った。

あ、忘れてたわ。恒例のあれ。

あたしは、あの忌々しいソウシの後ろ姿に、助走付きのとび蹴りをして、その場から逃げだした。

第九の問い「攻略はできそうなのか？」

全員の面会が終わったので、最初にいた部屋に戻ったあたしたち。

「俺は、遊びならいいけど、本気の恋愛となるとどうかなあ……？」

「僕は、暴力をふるう女性はやっと……」

「論外だ、論外。早く帰れ」

「ちよつとサイズ測っただけじゃんか。ケチな女の子は嫌い」

「ボク、女の人が苦手だから……」

「僕も無理。男性しか愛せない、悲しいハートを持っているからね」

あたしの目の前で好き勝手に言いくる、六人のイケメンたち。

ああ、あたしM属性じゃないからダメです……。言わないで……。

「そもそも、美女だったら行けたと思うよ？　なんで顔を変えさせなかったのさ。性格はそのまま、顔だけ変えることも可能でしょ？」

シエルがもつともな言葉を言う。

「あたしもそう思います！　なんでこの顔なんですか？」

食って掛かると、ふう、と呆れた顔をする王様。

「何を言っているのかね。恋愛ゲームだって、恋する男の子に、『やーいやーい、ブスー』とか言われているだろう」

「それは特殊なものなんです。照れ隠しというか、そんな感じですよ」
「だって主人公の女の子も、『あたし、不細工だし――』とか言っているじゃないか」

「それは行き過ぎた天然なんです！　自分の顔の良さもわからない

天然ちゃんなんです！　そういうのが萌えるんです！」

でも、とまだ言おうとする王様に、あたしは最後の言葉を投げつけた。

「いいですか！？　モテる女の条件は、一に顔、二にスタイル、三に胸なんです！　性格なんてどこにもありませんよ！？　よっぽど性格がいい人でも、顔がダメだったら恋愛対象から除外されますよ、除外！」

「なにっ！？　……おう……っ……」

威力はすごかったのだろう。ショッキングな顔をしている王様が、ふらりとよろける。

「そうだったのか……やはり男は顔なんだな……じゃあ、王妃を顔で選ばなかった私はいたい……」

「そうなんですか、あなた」

思わず口を滑らしてしまった王様に、王妃様がゆらりと近寄る。王妃様は、そのまま、人類の最期的な悲鳴を上げた王様を引きずりながら、兵隊を引き連れ部屋を出た。

「……かかあ天下……？」

あたしが一番しっくりくると思った単語と口にしたとき、頭に衝撃が。

「ったー……何すんのよ！」

後ろを振り向くと、手をグーの形にした、レイが立っていた。

「何じゃねえだろ、っていうかそれはこっちのセリフだバカ！ 男は顔で決めるだあ？ なめんなよ！ そういう女のほうが男を顔で決めてるんじゃないの？」

「もち」

そっけなく言ったあたしに、レイはもう一度こぶしを振り上げ、そのまま落とす。

がつん、と見事な音がした。

いったー……何すんのよ！

「いいかよく聞け。顔で好きなやつ決めるほど、俺たちはバカじゃねえんだよ」

あ、いい言葉。と、少し感動した時、レイが啖呵を切った。

「俺はお前と真剣に向き合う。だからお前も、真剣に攻略しに来い

！」

「え……？」

フリーズ。空気が凍り付き、背後に「……。」という文字が浮かぶ。

兄弟たちの冷たい視線を浴びて、しまった、というように口元をふさぐレイ。

だけど、言葉は取り消せません。

「言っただけ……？」

きらり、と目を光らせたあたしに、レイは慌てて、手で宙をかき回す。

そんなことしたって、言ったことは消せないもんねー！

「じゃあ、あたしは本気で、お前ら六人、攻略しに行くから、」

びし、と六人を指さす。

シエルに回し蹴りを連発されているレイを見て、少し同情してから、続きを話す。

「覚悟しててよ！ あたしは、異世界で逆ハーレムを作ってやるんだから！」

そこで、あたしの目の前の景色が変わった。

攻略キャラは六人。

遊び人、天然悪男、冷血人間、小悪魔、女嫌い、そしてホモ女装男子。

みんな、あたしに対しての印象は、対象外から、多くて十。

「攻略しまくるからね。覚悟しといてよー……」

それじゃあ、今から本当の、ゲーム・スタート！

「攻略開始っ！」

あたしは、ポカーンとしている彼らを見ずに、部屋から出て行った。

Q、攻略はできそうなのか？

A、今のところは不明だけど、やって見せる！

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 前編

攻略するって啖呵切ったけど、いったいどのようにして攻略するのか……。

あたしは、ドレスが汚れるのを気にせずに、腕を組みながら、屋敷の中を探検中。

等間隔で、高そうなツボが置いてあるのに少しムカツとするけど、まあ、歩いたほうが考えやすそうでしょ。

ぽふぽふと足音を立てながら、慣れないヒールで、歩きまくる。

「三人寄れば文殊の知恵というけれども、一人だし、何も浮かばないし」

真っ白な頭を叩きながら、独り言をつぶやく。

しばらく歩いていると、前からメイドさんが歩いてきた。

白いエプロンドレスに、レースのついたカチューシャ。うん、やつぱソウシのメイド服は趣味のものだな。にしても、よくあんな格好するよねえ……。

と、そんなことを考えていると、普通にすれ違うと思っていたメイドさんに、がし、と腕をつかまれた。

「はいっ!？」

「あの、保崎 秀名さんですよね!？」

ブロンドのツインテールを揺らしながら、切羽詰まった顔であたしに詰め寄ってくる。

「あ、あの、困ります、私いじめとかそういうのは経験したことなくてですねえっ!」

「違います、助けてください、あたしの恋を、指南してください！」
はいっ！？

彼女は、下っ端メイドのミル、というらしい。
メイドなんて、この屋敷に余るほどいるのに、しかも下っ端で、
ミルという目立たない名前という、とにかく存在が薄いのが悩みの
十八歳だ。

「ってあたしより年上ですかっ！？」

「ははは、いいんですよ……あたしなんかチビで、童顔で、胸もな
くて、性格も悪くて影も薄くてドジばかりしていつも怒鳴られて
……」

「あーっ、いいです、もうやめてくださいーっ！」

あたしがとめると、ミルさんは口を閉ざした。

「あたしが唯一褒められるのは、手先が器用なだけです」

唇をとがらせながら言うミルさんに、あたしは何とかフォロー。

「そんなことないですよ。大人の女性感がしますし、髪もきれいで
すし、手先が器用なんて乙女っぽいし、それから……えーっとなえー
っとお……」

「もっいいです秀名さん。本題に入りますね」

肩を落としたミルさんは、やや投げやりに話を変えた。

「あたしが今こうして秀名さんに声をかけたのは、言った通り、恋を指南してほしいんです。まあ、簡単に言うとコントロールです」

これ、と言ってミルさんが写真を取り出した。
写真には、茶色い馬の上に乗る、銀の甲冑を着た男性が写っている。

「この人は……？」

「あたしの思い人、カロさんです。かつこいいでしょう……？」

何故あたしに意見を求めてくる。まあ、確にかつこいいとは思
うが、そこまでずば抜けているわけではない。

つまりは、平均レベルだ。

そんなことを考えていると、涙ぐんでいるミルさんに気が付いた。

「やっぱ平均レベルとか思っているんですねーっ！ みんなに言わ
れるんですよーっ……！」

「え、あと、ミルさんは、なんでカロさんのことを好きになったの
？」

あたしが聞くと、真っ赤な目で見上げてきた。

「数日前です。あたしは、庭で、親とはぐれた小鳥を発見したんで
す」

ああ、想像つく……べたなパターンだろ……。
天井を仰いでいると、思い通りの答えが。

「どうしようかと思っていると、カロさんが来て、あとは任せて、
って言ってくれたんです。それから……」

「あー、あーっ、わあかった、わかった。とにかく？ どうすれば
いいの？」

「あたし、こんなこともあるつかと、すでにアプローチ済みなんで
す。あとは告白だけです」

自信満々に言うミルさんに、あたしは、

「まあ、まずは相手がどう思うかだね」

「え？ 立ち上がって、どうしたんですか？ これから何を……」

「もちろん、ミルさんがカロさんと会って、どんな反応をするのか
確かめに行くの。まずはそれから始まる」

逢いに行くよ、といったあたしに、ミルさんは赤面しながらも、
しぶしぶ立ち上がった。

話していた部屋を出て、しばらくすると、レイにあった。

「……うちのメイド引き連れて、何やってるんだ……？」

怪訝そうな顔をしたレイをスルーして、そのまま進む。
すると、慌ててレイが引つ付いてきた。

「なによ！ あんたに関係ないこと！」

「ある！ なにかされたら、俺が怒られるんだよ！」

「あんたに関係ないって言ってるんでしょ？」

あたしが口げんかを始めようと身構えたとき、ミルさんが、イイ
です来てください、といったので、レイはドヤ顔。

うつぜええ……。

「来てもいいけど、邪魔しないでよ？」

「だから、何をするんだ？」

「し・ご・と！」

Q、他人の恋を操れるのか？

A、絶対に成功させてみせる！

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 中編

「うん、あれがカロさんだね。よし、じゃあ行つて来い！」

少し歩いたところにある乗馬場で、カロさんを見つけたあたしは、乱暴にミルさんの背中を押す。

「わあっ!？」

背中を押され、バランスを崩したミルさんは、どて、と顔から着地。

どしん、といい音が響く。

その途端、優雅な馬たちが一斉に鳴き始める。

「ど、どうしたんだ……？ あ、ミルさん」

ようやくミルさんを見つけたカロさんは、茶色い馬から飛び降り、駆け足で駆け寄る。

「どうなんだ？ 今のところ脈ありか？」

ここに来るまでに事情を説明しておいたので、レイがあたしに聞いてくる。

「ああもつ、うるさいよ。黙ってて」

耳をふさいだあたしは、二人に神経を集中する。
ミルさんの前にはコマンド。『「ありがとう」』、『「大丈夫だから」』、『何も言わずに手を取る』。

うん、ここは無難にありがとうだろ。相手のキャラも不明だから。あたしは口パクで、ミルさんに伝える。すると、伝わったんだかどうか知らないが、ありがとぅ、と笑っていった。

「ナイス笑顔っ!」

「……お前、つくづく変なやつだな……」

怪しいものを見る目で、レイがあたしを見てくる。

「なんでよ」

「だってそうだろ。他人の恋なんか、ほっときゃいいのに」

あのねえ、と言いつ返そうと思って、口を開けたが、あたしの言葉の前に、カロさんの言葉。

「よかった。大したことがなくて」

「はえっ!? ひゃ、ひゃ……」

返す言葉が見つからなかったのか、ひゃ、を連発するミルさん。にしても、あたしのカンに狂いがなければ、告白してもいけそうな気がするんだけどな……。

そう思っ、あたしは手でミルさんと呼ぶ。

「はい? なんですか? あ、もうダメダメとか!? そ、そりゃあ緊張して噛んじゃいますよ!」

「そうじゃなくて。行けんじゃない? 告白しても」

すると、ミルさんの顔が真っ赤になった。

「こ、ここここ、告白う！？ いやいやいや、そんなあたしは無理です！」

「え？　なんでここまで来て嫌がる。もともとそれが目的だったんでしょ？」

「それでも心の準備があるということですよ！」

「あ、じゃあこうすればいいんじゃないか？」

急に口を挟んできたレイに、ミルさんはひゃあ、と悲鳴を上げる。
な、なぜに悲鳴……？

「あの、いくら王子とはいえ、プライベートに首を突っ込まないで頂けたく……」

「違う。ほら、明日は創立祭だろ？」

「あ、そういえばそうですね」

まった、待った！ 創立祭って何よ！

「創立祭とは、この国ができた日にちを祝う日なんです。屋台がいっぱい出て、お祭り騒ぎで騒ぐんです」

「その時、男女が好きな相手に花を贈り合うイベントがあるんだけどな……」

あ、その時に告白ってことね。まあ、お祭りだからいいと思う。

そう意見を出したあたしに、ミルさんは、え、でも、とまだいう。

「もう！　いいでしょ明日で！　この国が創立した日と、あんたたちの仲が創立した日、一緒に！　嬉しいでしょ、そうでしょう！？」

有無を言わせぬあたしの声に、こくこくうなづくミルさん。

「よし、それじゃあ決行だな。明日の朝に、私服で俺の部屋の前に集まれ。作戦会議するぞ」

「うん、そうだね。でも、その前に」

あたしはまた、ミルさんの背中を押す。

「創立祭に誘って来い！」

「あ、それがあつたか」

「きゃあああーっ！？」

Q、他人の恋を操れるのか？

A、うーん、ゲームならできんだけど、わかんない。

「あの、着てきました、私服……」

そういつてくるミルさんは、健康的な足を出した、ミニスカートの姿。

上は、ハートのワンポイントが付いたTシャツに、薄手のカーデイガンを羽織っている。

ほう、私服はあたしの世界と一緒になのか。

「まあ、いいほうだと思うぞ。……むしろ、問題はおまえだろ……」

レイは、肩のところに赤いラインが入った、いつものジャージを着ているあたしを見て、唸る。

「え？　だってあたし、参加しないんだしいいじゃん？　遠隔操作

するよ。トランシーバーみたいの、無いの？」

ザ・引きこもり発言をしたあたしに、レイはひじ打ちを食らわす。
うぐっっ……………」。

「おいメイド、こいつの服も用意してやれ……サイズは同じくらいだろ……」

「か、かしこまりました……」

こ、こんなん、ミルさんの恋、叶うのか……？

「叶うだろ」

ミルさんが出て行ったあとで、ポツリ、とレイが言う。

「と、言うか、お前が叶えるんだろ」

ニコリ、と、今までに見たことのない笑顔を見せる。
こいつ、笑うといい顔じゃないか……。

「……なんだよ、人の顔じつと見て……」
「なんでもなーい。もうそろそろ、ミルさん来るんじゃない？」

あたしは、頭の後ろで手を組み、投げやりに言った。
ま、今はこいつの攻略より、ミルさんの恋だよ！

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 後編

「ごめんね、待った？」

ナチュラルなポロシャツに、深緑色のカーゴパンツ。いかにも私服、といった格好をしたカロさんが、待ち合わせ場所に現れた。

うん、服装はまあまあね。あんまり気合入れてないみたい。かといって、手抜きそうでもないし……どんな心でここに来たのか、読み取れない。

「ま、待ってないです、ないです！　というかあたしが早かっただけで！」

時計を確認すると、待ち合わせ時間ぴったり五分前。
カロさんのキャラが読めない……。

「そうなんだ。何時に来たの？」

「い、今来ました！」

嘘つけ……待ち合わせ時間の三十分前には来たたる……でも、そんな乙女心、かわいい！

「……お前、さっきからぶつぶつ何言ってるんだ……？　せつかく服で磨かれたのに、そんな行動じゃ、意味ないぞ……」

パステルカラーのワンピースに、レギンスというあたしのスタイルに、妙な表情をしたレイが、ツッコむ。

そんな彼は、目印ともいえる、冬の夜空のような黒髪を茶色く染め、さらにはメガネをかけた、変装っぷりだ。

一応王子だということは隠せているようだが、やはりその顔立ちの良さで一気に黄色い歓声が。

近くの女の子の集団が、「あの女の人、彼女かな?」「えー、違うでしょ、兄妹何かだよ」「やっぱー? 釣り合わないよねー」という会話をしながら、あたしの横を通り過ぎる。

「……レイってさ、何歳?」

「十八だが?」

二歳差か。うん、そりゃあ、兄妹に見えるわな。

じゃなくて!!

いいのかあたし、あんなうっざい性格した奴らに、ブスとかなんだとか言われて!

「ブスは言われていないだろう……」

「言われてるの! あたし的には! ああもう、服だけがかわいすぎて、釣り合わない……あんとじゃなくて、服との相性だからね」

「それくらい言われなくてもわかるわ! ほら、あいつらが移動するぞ。追え」

あたしの手を引っ張りそういうレイ。

ああ、こういう少女漫画的尾行、好きじゃない……ってか、似合わない……。

「あれ食べたいです!」「あそこに行きましょう!」「あれはなんですか?」「ほら、カロさん、早く早く!」

ダメだー！ーっ！！！！

あたしは、お出かけ開始から一時間たったとき、とうとうミルさんを呼び出した。

「あんた、やる気あんの？」

明らかにガラの悪そうな声を出す。
すると、ミルさんは、はっ、となにかを思い出し、

「あ、今日はあたしの恋を叶えるために来たんですよー！」

「やる気ないでしょ。あたし、人ごみ苦手だし、帰ろうか？」

そういつて元来た道を歩こうとするあたしの手を、ミルさんが引っ張る。

「あああああっ！ すみませんすみません！ お願いです、帰らないでくださいっ！ ちゃんとやりますからあーっ！」

泣きながら頼んだ彼女に、あたしはさすがに情がわき、戻る。

「ほっ……それで、具体的にどうすれば……」

「そういうと思って、応募してきたぞ」

いいことをした、とでもいうように、レイがドヤ顔で、白いステージを指さす。

そこには赤い、大きな蝶ネクタイをした男性と、長机に座っている男女、合わせて数名。

その中でも最も目立つのは、中央に置かれた台と、その上に載った人。

何をするのかと思つていゝと、急に台の上の人がすつ、と大きく息を吸い込み――、

「バカ野郎————っ！！！！！！！！」

思いつき、叫んだ。

きーん、左側の耳から音が入り込み、右の耳から出ていく感じがする。

「っ……これに、参加するんですかつ!？」

「そうに決まっているだろう」

腕を組み、平然としているレイ。

うん、そのアイディアはいい。

「えっ！？ 秀名さんまで……」

「でも、言葉はあたしが考えさせてもらう。これでいい？　最後はあたしに決めさせてよ」

ウイंकをしたあたしに、不安そうに涙目なミルさんは、こくりとうなずいた。

『さて次は、かわいらしい十代の女の子が挑戦だ！ ミルさんっ！』

司会者の人が名前を呼び、おどおどしたミルさんが、舞台袖から出てくる。

ポケットに突っ込んだ手は、あたしが用意したあれが入っているのだろう。

そんなミルさんだが、台の上に上ると覚悟が決まったのだろうか、観客の席にいるカロさんを少し見て、大きく息を吸い込む。

そして、

「あたしは、カロさんが、好きですっ！」

今までのエントリー者よりも小さいが、彼女の精いっぱいのが響く。

その途端、観客がざわつき、観客にいる「カロさん」を探す。

「ずっと、ではないですが、やさしいあなたに、心が奪われましたっ！ これ、受け取ってください！」

そういつてミルさんが、カロさんに、あれを投げる。

「え？」

とつさに受け取ったカロさんは、不思議そうな声を出す。
手の中には、小さな、一輪のコスモスが収まっていた。

「あたしの大好きな花ですっ！ 受け取ってください！」

震える声を出して、しゃがみこむミルさんに、カロさんは、ふ、と笑った。

「これ」

ステージに上がってきて、カロさんが何かを渡す。

それは、ヒマワリの飾りが付いたピン止めだった。

「これなら例のイベントの一種だと気づかれないかなーって思っ
て用意しておいたんだけど、堂々と言っよ」

顔を上げたミルさんは、真っ赤になっている。

「好きです。付き合ってください」

その途端、ミルさんがうなずくのと同時に、わっ、と歓声が上
った。

Q、他人の恋は操れるのか？

A、あたしが出なくても、大丈夫だったと思うんだけどな……。

「いやー、いいことしたわー」

「何言ってるんだ、お前、告白の言葉考えただけだろ」

「それでも重要な。あ、おいしそうな肉！」

「肉ってなあ……」

あきれたレイと一緒に、あたしは夕日が照らす煉瓦の道を歩いて
います。

両想いになった二人は、ほおっておこう。リア充は敵。

「まあ、イイか。そういえば、これ！」

レイがそっけなく投げたのは、少ししおれ気味のタンポポだった。

「お前にはこれが一番お似合いだよ!」

なんかいいこと言われている気がしない……。
まあいいか。受け取っておこう。

「ありがとう!」

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 後編（後書き）

告白シーン、書くのが恥ずかしかったです><
こんなんで恋愛かけるのか……？ 私……ハハ；

第十一の問い「楽しいディナーになりそうか？」

「兄様と一緒に祭に行ったとか、死ね糞野郎！　いつそのこと地獄に落としてやるよ！」

屋敷に戻ると、玄関のところで、敵意丸出しなソウシがうなっています。

「にしても、恋を叶えた、とかいいこと言っているけど、実際のところ、二人とも両想いだったんだからその噂デマだよね！？　はいそのたつかぁーい鼻ひっこめろー」

あたしの鼻の上をちょんちょんと突つつくソウシ。
ちよっ、くすぐったいんだけど！

「でも、兄さんも兄さんだよ。なんでこんな糞尼と一緒に出掛けようとか思ったのさ。僕のほうが断然かわいいのに」

体をくねらせながら近づいてくる弟を、うつとおしそくに手で払う兄。^{変態}
う兄。

彼……というか彼女？　は、露出度高めのチュニツクに、クリーム色のムートンブーツ。

もはや自分の性別忘れてるよね、あんた。

「ふん。かわいいからいいんだよ。あんたは根性ごと腐ってるよね」
「見た目から性格まで腐ってるあんたに言われたくないんだけど」

ぱちぱちと火花を散らすあたしたちに、レイが静止に入る。

「おら、いい加減にしろよ。保崎は早く部屋に戻ってる。ソウシは――」

「今夜のレスチャーでもしてあげましょうか、お兄様」

「断じて断る！ お前は男の服を着て、部屋に戻れ！」

えー、と文句を言うソウシを無理やり引つ張って、レイが廊下の向こうに消えて行った。

「……ったく、仲がいいんだか悪いんだか。よくわからない……」

一人残ったあたしは、ポツリとつぶやいてみる。

うん、さみしい・むなしいのコンボだ。

「誰かいらないかなー」

「呼んだ？」

「呼んでない、遊び人」

さっきからいたとしか思えないほどの速さで、クロードが廊下の陰から出てくる。

「ほら、もう日が暮れてきたから、僕の部屋にでもおいでよ」

「意味わかりません。あたしは部屋に戻ります」

「それって、迎えに来てって誘ってるの？」

「違うーっ！」

ぶん、と腕を振りまわり、振り切る。

わざと足音を立てて去っていくが、とてとてと、捨て犬の目で見ている。

しばらくシカトしていたが、ついに堪忍袋の緒が切れた。

「さっさと自分の部屋に戻れ、ばかー！」

「え、これからディナーだよ？　そのために君を探してたんじゃないか」

「だつたら早く、言えっ！」

あたしは忌々しいクロードの足を踏みつける。

「ごめんね、僕、結構M気もあるんだ」

「死ね、糞っ！」

とは言わず、表情にだけとどめておく。

「うん、それじゃあ一緒にディナーに行こうか。席は隣に座りたいなあ。あ、秀名ちゃん、成人してる？」

さまざまな質問を繰り返してくるクロードに、あたしはもう一度、顔面パンチを食らわし、すたすたと、ディナーの会場に入って行った。

Q、楽しいディナーになりそうか？

A、いやー、無理っしょ。あの面子なら。

「それでは、いただきまーす！」

目の前の皿には、肉、肉、肉うゝっ！

「これ、本当に全部いいんですか!？」

「ああ、食べ食べ。まだまだあるぞ」

遠慮なくいただくあたしに、隣に座ったレイが、不安そうに眉をひそめる。

「お前、せつかくのドレス、汚すなよ」

心配なところはそこかい。

確かに、このオレンジのミニドレス、高そうだけれども……。

「さあ、成人したヤツは飲め」

「お父様、成人したものなど、僕たちの中に一人しかいませんが」

灰色の背広を着たシエルが、呆れ顔で言う。

なんだ、成人した人、一人しかいないんだ。

はたち

「うん。僕たち、クロード兄さんが二十歳、アシル兄さんが十九、レイ兄さんが十八、僕とジェルが十五、ソウシが十四だから」

「へー。結構歳、同じなんだね」

「そう。それで、秀名が十六でしょ？ ソウシと二歳離れてるねー」

な、なんでここでソウシの名前を出す……？

すると、今までサラダを黙々と食べ続けていたソウシが、ぴく、と肩を震わせる。

「シエルお兄様、なぜ、僕の名前をお出したのですか……？」

「そりゃあ、そしたら面白くなるからに決まってるじゃん」

「お兄様、今晚、お部屋に遊びに行きますね？」

黒い笑みを浮かべたソウシが、席を立つ。

何故、みんな、彼が、ピンクのマーメイドドレスを着ているのに
ツッコまないのだろうか……。

まあ、それは置いておいて（よくないが）、一人席を立ち、しかも
シエルが硬直している空気の中、楽しいお食事会、というわけに
はいかなかった。

みな、黙々とコース料理を食べ続け、あたりからは食器が当たる
音しか聞こえない。

そんな空気に耐えきれなくなったあたしが、こそりと部屋を出た。

第十二の問い「ソウシとは仲良くなれるっばいか……？」

「なんであんたがいるんだよ」

「こっちのセリフだ、バカ」

なぜか、星空がよく見えるテラスで、あたしとソウシはばったりと会いました。

いやー、本当は靴のつま先が出口に向かつてるんだけどね。まあ、こいつも逆ハーの対象だし、この機会に奴と親睦を深めておこうではないか！

「えーっと、そういえば、ソウシって、なんで男の人が好きなの？」

あたしがこわごわ聞くと、ソウシは少し怒っているのか、声を荒げながら答えた。

「君が男の人を好きなる理由と同じだよ」

「え……？ あたし、恋愛はあまり好きじゃないなあ……っていうか、恋愛って、したことないし」

そういうと、ソウシが信じられない、という風に目を大きく見開いた。

な、何か文句あるの！？

「意外だね。疎い女子キャラとかマジでうざい！ とか言いそうなの」

「あたしは疎くないの。ただ興味がないだけ。機会がないっていうのもあるし、ゲームの中のほうが、よっぽと安心してできるじゃない？ だから、リアルでは避けて通ってきた道というか……そんな

ところ」

くるりとつま先の位置をソウシに向け、あたしはあいつの上に広がっている、ピカピカと光る星空を見ながら答える。

ああ、きれいな夜空だ……。

あたしがじつと上を見ていると、いきなり噴出したソウシ。

「……ぷっ……！ あんたに星空とか、似合わねー」

「失礼にもほどがあるわよ！ あんたねえ！ 女装していなかったら、もったいい絵になったのに」

「え、ということは、今でも絵になってるってこと？」

ぴら、とピンクのマーメイドドレスの裾を持ち上げ、にこりと笑う。

あ、あたしはないと思うっ！

「正直になりなつて。ま、僕は男性以外はこの瞳に入ってこないんだけどね。不思議と。だから君も僕の視界には入っていないよ」

あたしを指さし、くすくす笑いながら言うソウシに、あたしは回し蹴りをする。

しかし、奴はギリギリのところじゃがみ、代わりにあたしの足を払う。

盛大にしりもちをつくあたし……。

「なんだ、弱いな」

「本物と偽物の違いがよーくわかっただろ。本物はか弱いんだよ」

「え？ 自分、偽物って認めちゃった？」

「どう考えてもお前が偽物だろ、この変態ホモ女装男子！」

Q、ソウシとは仲良くなれるっぽいかな……？

A、うーん、まず意欲を持たなきゃね……。

口論を始めてから約三分の間に、あたしたちはいろいろと罵り合った。

「だいたいね、女装の恰好がいくらかわいいからって、男が釣れるとか思ってたんじゃないわよ！」「釣れるよ。僕は、君よりかわいい自信がすごくあるんだけど？」「可愛くても中身は男だろ！性転換してからそういうセリフ吐けよ！」「いいさ性転換してやるよ。異世界にトリップして性転換してやるよ」「どどういう目的でお前が召喚されるわけ？」「お前みたいに？ 逆ハー作れって」「無理に決まってるでしょ！ 性別の時点で無理！」「いやあ？ わかんないよ。だって、性転換したら中身女の子だし？」

他にも色々と言いつつ合っていたが、すべて書くとは貴重な行がつぶれてしまうので、ここらへんにしておこう……。

とにかく、あたしと罵り合いをしていたソウシに、運悪く見つかったしまったのは、

「あつ！ ジエル兄様！ デイナーはいかがでしたか？」

くるくるの巻き毛が目立つ、ジエル君。

女の人が苦手なジエル君は、壮絶な罵り合いをしていたあたしたちを、好奇心で観察していたが、見つかったしまったらしい。

「あの、僕に関係なくお二人は修羅場をしていてください……！」

「ジェル兄様。今夜のお約束、忘れていませんよね……?」

上目づかいで聞くソウシに、涙目だが何とか反論したジェル君。

「わ、忘れました、そんな約束!」

「では、今から行きましょう、お部屋に」

ぐいぐいと引っ張るソウシ。

見た目こそ女の人だが、腕力は男だ。か弱いジェル君は、かわい
そうに、ソウシに連れ去られてしまった。^{悪魔}

「頑張つて、ジェル君……」

彼らの背中と、ジェル君の「助けてーっ!」という悲鳴を聞きな
がら、あたしは同情の目を向け、合掌した。

無事に、今日を乗り切ってほしい……。

第十三の問い「弱みを握ってみようと思っのだが……？」

「はーあ……。なんか疲れた……」

肩を落しながら、あたしは廊下を歩いています……。
どうも、ソウシといると疲れてしまう……。

「こんな時こそ、一人、ラノベを読むんだ！」

ぐ、拳を作って、さっそく近くのメイドさんに、本が読めるところはないのか聞く。
すると、

「それなら、図書館に行ってはいかがですか？」

と、図書館っ！？

図書館なんてものが屋敷の中にあるのか！？ どういうことだ！
少しシヨッキングなあたしを残し、メイドさんは足早に去って行った。

「よし、向かおう」

声に出していったはいいものの……。

「どこにあるのか聞いてねえーっ！」

うん、バカをしました……。

とりあえずほかのメイドさんに場所を聞いて、あたしは図書館の扉を開けた。

すぐに、ほこりと、古い本のおいが鼻を衝く。

「うぐっ……絶対、ラノベとかなさそうなおい……」

帰ろうかなあ、と思っていると、上から声がした。

「どうしたの？ 読書？」

不思議に思い上を向くと、上のほうの本を取る用だろうか、梯子に、足を組んで座っている、アシルの姿があった。

「……あたしが読書をするの、そんなに変ですか？」

「そうだね、かなり変だと思うよ」

ぐさあっ！

アシルの言葉が突き刺さる。

「……で？ どの本を読みに来たの？」

悪気のなさそうな顔に、あたしは奴をにらみつける。
この、天然の悪男がっ！

「ラノベです。ありますか？」

「……らのへ……？」

ひらがなの発音で不思議そうに聞き返す、アシル。

「この世界にはないんですか？」

「ないねえ。らのべって、いったい何の本？」

首をかしげるアシルに、あたしは語りまくった。

ラノベのいいところをつ！

「ラノベとはですね、ライトノベルの略なんです。主に中学生から高校生に向けて作られている本で、まあ今となっちゃ年齢なんて関係ないんですけどね。挿絵は漫画やアニメ風のイラストで、結構ツボなんですよ、これが。もともとは「ジュヴナイル」みたいな名前だったんですが……って、聞いていますか？」

腕を組み、顔を下げ、コックリコックリしているアシルに、あたしは質問。

「……………え？ ああ、聞いているよ聞いているよ」

ニコニコ愛想笑いを浮かべるアシル。

「……………聞いていないでしょう……………ところで、その本はなんですか？」

あたしは、彼が持っている水色の本を指さし、聞いてみた。

「ああ、これ？ 前にも言った本だよ。『Q、猪瀬でハンバーガーは食べれるのか？』だよ。読んでみる？」

フルフルと、首を振って拒否。

「残念だよ。じゃあ、好みの本を探してね」

そういつて、読書に戻ってしまったアシル。
う、なんかこれはこれでさみしい……。
うん、本以外の話題を出してみよう。
そうだなあ、何がいいかな。

「あ、そういえば、アシルさんって、好きな人とか、いないんですか？ いなかったら、タイプとか……」

ぶっ！

勢いよく噴出したアシル。
え、何その反応！

「げほ、げほ、げほっ！」

「いるんですね。誰ですか、誰ですか？」
「いない！」

うそでしょ、とはやし立てたあたしに、彼は手元にあつた辞書サ
イズの本を落としてくる。

え、痛そうだよそれはダメ！
すれすれのところでよける。

「で、どうなんですか？」

今度は真剣に聞いたあたしに、コホン、とせき込むアシルさん。
うん、何かありそうだ！

Q、弱みを握ってみようと思うのだが……？

A、
イイよ良いよ！
こいつの弱みは、
好きな人だっ！

第十四の問い「どのような夜をお過ごしですか？」

「ないよ、ない。そもそも、いたら自己宣告して、このくだらない、お父様による恋愛ゲームから一抜けさせてもらおうし」

もっともな正論だけど、あたしにはまだ潰け込む余地がある。

「……周囲に反対されそうな恋なんですか」

その途端、アシルはひきつった顔で、あたしに笑いかけた。

「何を言っているのかな、保崎さん」

「うーん、そうだと思うんですが。違うんですか？」

「ち、違うといわれたら……反論できない自分がいるね……」

認めた。

少し違う気がするが、認めたと同じ事だろう。

「どんな方なんですか？」

もう後に戻れないと思ったであろう、アシルはしぶしぶ口を開いた。

「メイドだよ。元、下級貴族の」

「メイドさんかー。ずばり、手ごたえはあるんですか？」

「てっ、手ごたえっ！？ わ、わからないよそんなこと！」

顔を赤くし、照れるアシル。

そんな乙女顔、しなくていい！

まあ、あたしならその恋、叶えてあげられる自信がある。でもそんなことしても意味ないしな……面白いだけで。そう思っていると、アシルがピシ、と人差し指を立てた。

「そうだ。等価交換をしないか？」

「等価交換？」

「うん。僕は、両想いになりたい。好きあつていれば、お父様もさすがに許すと思うし。で、君は、早く元の世界に戻りたい」

梯子を優雅におりながら提案する、アシル。

「僕が両想いになれば、君は僕をハーレムの対象にしなくてもいいし、僕自身も利益がある。どう？ いい案だと思うけど？」

地に足を付けたアシルは、にまりと、ドヤ顔。

「どうする？」

最後に言われ、あたしはうなずいた。
有無を言わせない声だったしな。

「じゃあ、取引成立ー。明日、朝に、僕の部屋集合ね」

一礼をして、部屋から出て行った。
にしても、こいつの好きな女の人って、どんな人なんだろう。楽しみー！

「ぎゃーっー！」

あたしはその声で目が覚めた。

時計を見るとまだ夜の一時。まったく、なんの悲鳴だよ、殺人事件でも起きているのかよ。

枕に顔を押し付けながら、しばらく考えていたけど、あれは多分レイの声だ。ソウシに何をさせられてるんやら……。

答えが出て、よけいにすっきりした頭。これでは、当分寝れないだろう。悲鳴はまだ続いているし。

「廊下に出るか……」

ゆったりとしたパジャマ姿のあたしは、手元にあった懐中電灯を手にとって、部屋のドアを開けた。

「わー……暗いー……こわー……くなんかないぞ」

悲鳴のよく聞こえる暗い廊下は、まるでホラー映画のワンシーンだ。

その中で、一人たたずむ女の人……うん、何かでそう。

「あーヤダヤダ。夜風に当たって、早く戻ろう……」

そういつて、自分を元気づけ、一步踏み出そうとしたとき――、

「何かお探ですかぁー……」

とん、と肩をたたかれた。

硬直しそうになる首に必死で鞭を打ち、あたしは後ろを振り向いた。

そこには、長い黒髪を無造作に伸ばした、メイドさんの姿――。

「き、きやあああああつ!!!!」

長い夜は、まだまだ続きます。

Q、どのような夜をお過ごしか？

A、幽霊っ！ 幽霊が出ましたああっ!!

第十五の問い「意中の人は、誰か？」

「保崎さんっ！？ どうした——」

近くのドアから、心配そうなアシルがひょっこりと出てくる。

あたしは後ろに立っているメイドさん——いや、幽霊を指さし、酸欠状態の金魚のように口をパクパクとさせ、アシルに助けを求める。

すると、なぜかホツとした表情になるアシル。

「……………ランドさん……………夜は危ないと、言っているでしょう……………」

「いえ、しかしランドは、ご主人様^{マスター}から命令を受けておりますので」

にこやかに話す二人。知り合いらしい。

「あいつ、ランドさん……………ですよ？ 誰なんですか？」

すると、ランドさんは黒髪をバサツと振りながら、こちらを振り向いた。

「ここのメイドです。ランドは物心ついたときからこの屋敷にお世話になっています」

機械のような口調で淡々と話すランドさん。よく見ると、顔はすごく整っている。

半分しか開いていないと思われる瞳に、薄い唇。白目の肌は、闇を反射している。パーツごとに描いていくと、病人みたいな感じだけど、おかれている位置は絶妙なバランス。

「あなたは——確か、『乙女ゲーオタクの変人』さんですね」

ぴきつ。

うん、確かに顔はひきつった。

「だ、誰からそんなあだ名を教え込まれたんですか……？」
「レイ様です」

あんの、性悪男ーっ！

「ランドは、レイの専属メイドだからね」

「あの人は、嫌いです」

ランドさんは、アシルの言葉を遮るように答えた。

「性格が悪いのです。ランドのことを何度も何度も足蹴りにしやがって、ランドがにんじん嫌いなのを知っているくせに、ランチに、にんじんのソテーとか出してきやがるのです。その割に、自分が嫌いな魚をランチに出させなくしているのです」

今までは機械のように単語として出てきた言葉だけど、レイの悪口を言っているときは、なぜか生き生きとしている——、気がする。

「というわけで、今、レイ様が発しているこの悲鳴ですが、ランドにとってはざまあ見やがれこの野郎程度にしか思わず、助けるそぶりさえ見せないのです」

「あ、そうですか……」

何故、後半説明するような口調だったのだろう……？

「ところで、アシル様、保崎様。お部屋に戻ってはいかがでしょう」
首を九十度に曲げ、ロボットののような恰好で聞く、ランドさん。
その時、一瞬、アシルがさみしそうな顔をしたのを、あたしは見逃さなかった。

「そうだね。早く寝ることにするよ。ランドさんも、あまり遅くまで徘徊しないでね。危険だから」
「ランドはレイ様の悲鳴が途切れるまで徘徊しています。お屋敷の中ですし、あまり危険はありません。ですので、早くお戻りください」

はいはい、と生返事をして、アシルはあたしの首根っこをつかみ、ランドさんと離れた。

「……………ところで、アシルさん」
「何かな」
「あなたの好きな人って、ランドさんですか？」

ば。

あたしの首根っこをつつかんでいた手が急に離れ、バランスを崩したあたしは、しりもちをついた。

「そ、そのことに関しては明日、明日つ、説明するよ。じゃあねっ！」

明らかに動揺しながら、アシルは近くの扉に入って行った。

「そこ、女子トイレなんだけどな……」

あたしのつぶやきは、二つの悲鳴にかき消された。

Q、意中の人は、誰か？

A、ランドさんだと思うよ。 たぶん。

すっかり夜も明けて――、
次の日。

あたしは、パジャマ姿のまま、アシルの部屋をノックした。

「はいはい」

寝起き直後のような声がして、アシルが出てくる。

「えっと、さっそくですが、意中の人って、ランドさんですよねっ
」！

「本当にいきなりだね…… 答えは――、yes、かな……」

うーん、あの人を攻略するのか――、難易度がすごいな……。

第十六の問い「攻略方法は、あるのか？」

「と、言うわけで、『ランドさんの好みを探ってみよう！ 』の会』、第一回目の会議を始めます！」

あたしの持つてきた黒板を呆れた顔で見ながら、アシルが手を上げる。

「質問です。そのとんでもないセンスの名前を何とかしてもらえないでしょうか……うぐっ！？」

「そんな質問は受け付けません」

額に飛んできた黄色いチヨークを拾い上げ、アシルが涙声で反論しようとしたが、あたしがチヨークを構えたので、黙り込んだ。

「で？ 意中の人の好きなものとか、知らないの？」

「知らないよ。無防備にそんなこと聞いて、僕が好意を持っていると気づかれたらダメじゃないか」

「なんで？」

「メイドとの恋は、あまり普及されていないからね。むしろ、メイドのほうは遺産目当てだと思われがちだから、反対されるに決まっているし、最低、メイドは屋敷から出されるだろうね。それは阻止したい」

真剣な瞳のアシルに、あたしはくすりと笑う。

「……………っ、な、何！？」

驚いた表情をする。

「いや、本当に本気なんだな、って。いいね、そういう恋。あたしもしてみたいなー、って」

そんな一言に、頭を撫でて返事をしたアシル。

「ハーレムの対象の中から、好きな人を見つけてみたら？」
「無理です！」

がば、と頭を上げたあたしに、びっくりしたのか、後退するアシル。

「あんな奴ら、友達でも無理ですよ。って、話を戻しましょう！とにかく、ランドさんの好きなものを探りましょう！」

慌てながらこぶしを上げたあたしに、やさしく微笑むアシルさんであつた……。

Q、攻略方法はあるのか？

A、うーん、見つけてみたい！

「ラルー！」

「あ、いいところにいました保崎さん。かくまってください。ランドは今、追いかけているのです」

とりあえずランドさんのところに行こうと思って部屋を出たあたしは、スカートをうつとうしそくにしながら走る彼女に出会った。

「ラルー？」

「ランドの別の略し方です。ランドの名前は、ラルドイドですのでとにかく、この部屋に入れさせてください」

答えを待たずに素早く入ってしまったランドさん。

「って、そこ、アシルさんの部屋ですけどっ!？」

あたしは止めるが、鬼の形相で追いかけてくるおばあさんメイドをドアの向こうで見つけ、無理です、とでもいう風に指でバツテンを作る。

仕方がないので、あたしもすばやく部屋に入る。

そこには、顔を少し赤くしながらも、冷静を装っているアシルさんがいた。

「な、なんでここに!？ どうしたんですか!？」

「昨日の鬱憤を他人に八つ当たりしようとしたレイ様に、暴言を吐いたのです。そうしたら、ミセス・ディカーが鬼の形相で追いかけてきたのです。お分かりですか、アシル様」

「わかりました……ちなみに、その暴言とは……?」

「『お前は同性愛者の弟による犠牲者の一人にでもなればいいのです』といいました」

そ、それはあたしでも怒るぞ……?」

「ど、ドンマイですね……。ところで、いつまでかくまえばよろしいのですか……?」

「別にいいです。ジェル様でも脅して、どこか違うところにかくまってもらいます」

そういつて窓に足をかけたランドさんを、慌てて止める。

「ランドさんっ！　ここ二階ですよっ！」

「二階ぐらいどうってことないのです。ランドならこのくらい骨折しないで飛び降りれます」

淡々というランドさん。

「ダメですってー！」

腰にしがみつくあたしを振り払って、ランドさんは窓から飛び降りました……。

第十七の問い「レイに質問。上手くいくと思う?」

「……自由奔放な方ですね……」

窓の下をのぞき、ランドさんの姿を見送って、あたしはアシルさんに一言いう。

「そうですよね……」

げっそりしているアシルさん。

「そういえば、なんでジェル君のところに行くんですか?　かくまっつてもらうなら、ここでもいいのに」

「ジェルはランドの下僕的存在だからね」

あ、そういう意味か!。

納得したあたしは、アシルさんを引っ張り、部屋を出て行くことにする。

「な、なんだい!？」

「レイなら、ランドさんの好みとか、知ってるかもしれないじゃないですか」

「でもっ……」

なんだか腰が引けているアシルさんに、あたしは喝。

「いいからくるっ!」

「……はい……」

今の女性は、まったく恐ろしい、などとぶつぶつ言っていた奴にけりを入れて、あたしはレイの部屋へと向かった。

Q、最終手段、レイに質問、かあ……うまくいくと思う？

A、考えたくもない。

「レイっ！」

ばたーんと盛大に扉を開け入ってきたあたしとアシルに、レイは読んでいた本を落とし、びくりとする。

「なんなのよその反応は」

「いや……」

冷静になろうとしているのか、軽く自分の頬を叩きながら、レイは答えた。

「こいつらに今、自分の感情をぶつけようかぶつけまいか悩んでいた」

目の前にあつた花瓶から、花を抜き取る。

「え、保崎さん、さすがにそれは」

ばっしやーん。

花瓶の水をレイにぶっかけたあたしは、満足げにうなづく。

隣で、アシルさんが顔を蒼くしながらあたしを見つめている。

「.....」

しばらくの沈黙の後、

「さっさと出てけ、この雌豚ッ！ お前の顔を、二度と、俺の前にさらすなッ！！ いいな！？」

水をしたたらせながら、唾の飛んでくるような勢いでレイに怒鳴られた。

あたしは反論しようとしたが、その前に、アシルさんに引きずられ、部屋を出て行った。

「ばかですかあなたは！ あんなプライドの高いレイに、水をかけるなんて.....ふざけるのもほどほどにしてください！」

ああ、パジャマ姿のまま、ついに外に出てきてしまった.....。

ここは一面に薔薇が咲き誇る、薔薇園らしい。甘い香りと鮮やかな色が、癒し効果に抜群らしい。

「ふざけてないです。あたしは自分の感情に忠実なだけで.....」

「それがいけないのです、それが！ ランドさんも見失ってしまっ
たし、これからどうすれば——」

「呼びましたか？」

頭を抱えたアシルの背後から、げんなりしたジェル君を引き連れ

て登場したのは、ランドさんだ。

「ららら、ランドさんっ!？」

「はい、ランドです」

うるたえるアシルさん。首をかしげるランドさん。
それに。

「ほほほ、保崎さんもいらしたんですね……………」

顔を紙のように白くしたジェル君。

「いりましたよ」

にこりと、営業スマイル。

ああ、なんだか大変なことになりそう……………な、予感……………？

第十八の問い「必殺・二人きり発動。上手くいくと思うか？」

「立ち話もなんですので、とにかく座りません？」

近くの、そっけないベンチを指さして提案したアシルさん。
その言葉にうなずき、それぞれ、思いのところに座る。

いや、これが肝心なんだよ。

今、アシルさんは両隣に人が座れる状態。その隣に、すかさずあたしが座る。

アシルさんの隣は一つしか空いていない。あたしの隣も座れる。
ランドさんは、果たしてどこに座る——……。

「あ、このベンチイね」

当たり前のように、素早くアシルさんの隣に腰を下ろす、ジェル君。

「……………」

あたしは無言でジェル君をにらむ。

「!？」

何があったのかわからない、という風な顔でこっちを見るジェル君。

「何？ ジェル君。あ、座って座って」

無言の圧力でジェル君を黙らし、あたしの隣にランドさんを座らせようとする。

「いえ、ランドはただのメイドなので、ここで立っています」
「いいって。座りなよ」

ぐい、と腕を引っ張ると、やれやれ、という風な顔をしてから、
ゆっくりと腰を下ろす。

「にしても、保崎さんはなぜにパジャマなのですか？」
「え？ ああ……」

自分の服を見おろし、苦笑い。

「急いでいたから……」

「？」

「あ、気にしないでください。保崎さんにもいろいろあるんですよ」
「」

密会していた内容を話されたら困るアシルさんは、二人で会っていたことごと隠し通す手段に出たようだ。

「そうですよ、服がジャージじゃなくなて〜」

「え？ お部屋にドレスが置いてあったはずですが」

「ドレ……っ!？」

マジか。部屋に戻ったら確認しよう。

こうでもしないと、ドレスを着る機会を逃してしまう。

人生に後一回、あるかないかの機会だ。これを逃したら、あとで後悔するだろう。

その時、ピーン、と、いい考えが浮かんだ。

「アシルさん」

近くで耳打ちをする。

「二人きりになってもらいます。この機会、逃したら後悔しますよ」
「……………っへ!？」

返事を待たずに、あたしは立ち上がる。

「それじゃあ、着替えてこようと思います!」

そして、腕を伸ばし、ジェル君の手をつかむ。

気合が入って、少しばかり、強くつかんでしまったけど、大丈夫
だろ。

「っ…………!？ 痛いですが、離してください、アレルギーが出るんで
すうーっ!」

鋭い悲鳴を耳元で叫ばれるが、頑張つてスルー。

うつ、でも鼓膜敗れそう……。

「じゃっ、そういうことでー!」

「はーなーしーてーくーだーさーいー!」

涙声で叫ぶジェル君を誘拐し、アシルにウインクをして、その場
を去った。

うまくやってくれるかな、アシルさん。

Q 必殺・二人きり発動！ うまくいくと思うか？

A、必殺だから、うまくいってほしい……。

第十九の問い「何故、女性が嫌いのですか？」

アシルさんから離れて、数歩歩いたとき。
あたしは、重大なことに気が付いた。

こっちも、逆ハ―作るチャンスじゃん！

そう、今はジェル君と二人きり。こんなチャンス、めったにないぞ！

と、言うわけで。

「ジェル君」

急に振り返ったあたしにビビりながらも、ジェル君は「はひっ！
？」と返事。

「あのさあ、いつから女の人、苦手なの？」

うん、まずはこのことを知るのが先だ。なんで嫌いかは、ただ単に、怖いだけだろう。前にも言ってたような記憶があるし。

「いつからって……十年ほど前ですかね？」

遠い目になったジェル君は、話してくれた。

Q、なぜ女性が嫌いのですか？

A、……下を読んでね！

「小さいころ、ぼくはランドさんと一緒に、遊んでいた覚えがあります。それも、一度や二度ではなく、頻繁に。その時はまだ、女性恐怖症ではありませんでした。」

そんなある日です。ランドさんが急に、何かを僕の目の前に見せてきたんです。

それは――、それは――、

涙声で話すジェル君を見て、あたしもごくりとつばを飲み込む。

「それは――？」

「それは、蛇の抜け殻なんですううーっ！――！」

あああー、と泣き崩れるジェル君。きっと、過去のことを鮮明に思い出したのだろう。

でも、蛇の抜け殻なんて、あたしはびびらないし、触ることもできる。

――何が怖いのだろう？

「彼女はっ、僕が爬虫類全般的に無理なのを知って、見せて来たんですよーっ！――っ！ 計画犯罪です！ 死刑にでもなれです！ 最悪です！ それから僕は、女性を見るたびに、ランドさんが持ってきた蛇の抜け殻を思い出すようになって――……怖くなっただす……」

な、なんでそこから女性嫌いになる！

「ランドさんが、同僚のメイドさんに話しまくっただですよ、その

ことを！ 僕は一時期、屋敷中の笑いものになって……女性の情報網は恐ろしいです！！」

そして、あたしの顔を見ると、

「へーーーーびーーーーっ！！！！」

「失敬な！！ 死ね！」

あたしの顔を指さして悲鳴を上げたジェル君の足を踏みつけ、ふんと鼻を鳴らし、顔をそむける。

思わずしゃがんだジェル君は、うるうるの目でこちらを見て、

「最悪ですね！」

と怒鳴る。

「最悪なのはそっちだ！ 乙女の顔を指さして、蛇だあ！？ 寝言は寝てからいいな！ あと、ランドさんにだけ恐怖の感情を抱けよ！」

「いや、彼女は特に怖いですよ」

何のフォローだ！

「とにかく、こいつは女性嫌いを克服しないといけないみたいだね……」

にやりと黒い笑みをしたあたしに、ジェル君はひいっ！？ と顔を白くした。

「アシルさんのミッションに加え、ジェル君の女性嫌いも克服させ

ないかね！」

ああ、やる気上がったきた！

第十九の問い「何故、女性が嫌いなのですか？」（後書き）

お気に入り小説登録件数が、百を突破しました！
みなさん、ありがとうございますー^^

第二十の問い「三角関係はお嫌いですか？」

1

場所は変わり、アシルとランド。

「……行ってしまった……」

呆然と秀名がいた場所を見て、ポツリとつぶやくアシル。
その隣から、心配そうな顔のランドが、はてなマークを出す。

「あ、ランドはあの二人を追いかけてきます」

ランドが走り出そうとして——、アシルは、つい、とつさに腕をつかんでいた。

さあ、とランドの長い黒髪が揺れる。

それに見とれていると、不機嫌そうな顔で、「なんですか？」と聞いてきた。

「あー……イヤー……」

小首をかしげたかわいらしいしぐさに、アシルは、つい、心の中のことを言ってしまった。

「えーっと、あつと——……その、好きです！」

「何を言っているんですか。からかわないでください。ランドは追いかけます」

普段と変わらず——いや、普段より機械的な声で即答され、アシルは彼女を追いかけるのを忘れていた——。

「——それで今、魂が出ているんですね」

「わかってよ、保崎さん……」

胸元にお花が付いているだけの、膝丈のシンプルなドレスに身を包んだあたしは、アシルさんの魂を捕まえようとしながら、ため息をついた。

数分前、ドレスに着替え終わったあたしが、ジェル君の女性嫌いを直そうという計画を立てていたとき、急にドアが開き、アシルさんが口から魂を出しながら、いきなり部屋に入ってきたのだ。

「……………それで、保崎さん……………望みは——」

「ないですね」

即答をしてしまったあたしは、さらに顔色を悪くしたアシルさんに気付き、慌てて付け足す。

「いや、あくまでもあたしの意見ですよ!？　ほら、本当に冗談と思っただとか——」

「ないですよー。即答はないでしょう。それに、答えたときの声が感情は言っていないませんでしたし……………」

ネガティブ・シンキングなアシルさんにあたしはチョップ。

「……………っ！　な、何をするんですか!？　痛いですよ!？」

魂を一気に吸ったアシルさんは涙目であたしを見て、怒鳴る。

頭を痛そうに抱えているけど、そんなに痛かったのだろうか？

「ネガティブですよ！ もっとポジティブに行きましょう！ ほら、僕とランドさんは両想いだー！」っ

その途端、顔を赤くしたアシルさんは慌ててあたしの口を押える。

「じ、実名出さないでくださいっ！ もし誰かにバレたら、大変なことになるんですって、何度も言っただでしょう！」

あーそうでした。

にしても、ランドさんから何か、聞いといったほうがいいかな？

「あ、アシルさん。あたし、ランドさんに探り入れておきますねー」

高いヒールに苦戦しながらも、あたしは駆け出した。

「って、ちよっ！」

背後にアシルさんの声が聞こえたが、あたしは無視してドアを開ける。

すると、目の前には、ランドさんとジェル君の姿。

いや、きょとんとしているランドさんと、顔が真っ白で、ランドさんに担がれている、ジェル君。

「あ、すみません。開くとは思いませんでした」

「こ、こちらこそごめんなさい。それより、これはどうしたんですか——？」

あたしはジェル君を指さす。

まるで、さっきまでのアシルさんだ。

「いえ、確保しただけです。それでは」

た、と地面をけろうとしたランドさんの腕を、つかむ。
うん、いろいろと聞き出そう。

にやりと黒い笑みをしたあたしを見て、ランドさんは何かを察知した——ようだった。

Q、三角関係はお嫌いですか？

A、——ノーコメント——

第二十の問い「三角関係はお嫌いですか？」 2

「んじゃあ、ランドさん誘拐していきますねー！」

がし。

ランドさんの腕をつかみ、連れ去ろうとする。
が、殴られたり蹴らりたりと、強烈な抵抗をされる。

「……………何してるんですか……………」

あまりにてこずるあたしに、心配したジェル君が聞く。

「大丈夫さ！」

きらりと齒を光らせかつこよく言って、ランドさんの足を払う。
予想外のことだったのか、バランスを崩したランドさん。
その隙に、あたしは引きずって、拉致を成功させた。

「っ、なんですか、保崎さん！ ランドは、やましいことはばれて
いません！」

「ちよつとカミングアウトしたよね」

ぐ、と言葉を詰まらせる。

「そ、そんなに、アシル様のおやつを食べたこと、重要なんですか
……………」

小っちゃいな！

「そんなことじゃなくて。ランドさん、アシルさんの告白、断ったよね」

あたしが聞くと、す、とランドさんの顔から表情が消える。

「ランドさん、思いの人、とかいるの？」
「いません」

機械的な声が響く。

「ふーん」
「いません。いないです。いないっいたらいません！」

ムキになるランドさん。
赤面しているから、きつといるのだろう。
うん、恋する乙女はかわいい。

「えー？ 言わなかったら、アシルさんのおやつ、食べたこと言っちゃうけど、いいのかなあ？」
「別にかまいません。仕方がないことです」
「えーっと、何だっけ、あのメイドさん——そうだ、ミセス・デイガーに言っちゃうぞ」

ぐ、ど黙り込んだランドさんに、とどめの一言。

「ちょぉー怒られるだろうなー。『ラルーつつつ！……！』みたいなの？」

怖い顔でランドさんの名前を呼ぶと、効果てきめんだったようだ。

「うっ……い、言いますから、誰にも告げ口しないでくださいよ……？」好きな人のこともそうですからね」

仕方がない、
とでもいう風にため息をつく。

それから数秒後、覚悟が決まったのか、顔を上げる。

「で？ 誰？」

「……その、ジエル様です……」

言っちゃったー、と顔を隠すランドさん。

「.....ええええええええええええつっつ！！！？？」

あたしの怒鳴り声は、屋敷中によく響いた。

Q 三角関係はお嫌いですか？

A、いや、ゲームの中とかでは好きなんだけど……。

「ええつつつ！！！！？？？」

秀名の悲鳴と、

「くちゅっん！」

ジェルのかわいらしいはくしょんが、見事に重なったのは、後日、
わかったことだ。

第二十の問い「三角関係はお嫌いですか？」 3

よ、よくわからない事態になってしまった……。

あたしは混乱した頭を整理するために、図書館にいます。

数冊のラブロマンス小説を傍らに、部屋に置いてあった紙と筆記用具を机の上にちらべ、頭を抱える。

「……………まずは、アシルさんがランドさんのことを好きで——」

何も書いていない紙に、アシルさんの似顔絵を描いて、ハートのついた矢印を隣に描き、そこにランドさんの顔を書く。

「ランドさんは、ジェル君のことが好き」

ランドさんの隣に、先ほどと同じような矢印を描き、すぐ近くにジェル君の似顔絵。

ジェル君の矢印を描こうとするが、わからないのに気が付いて、ボールペンを置く。

「……………面倒くさい事態だ……………」

これ以上、アシルさんに期待はさせてはいけないのかもしれない。

「言うか——……………？」

頭の後ろで手を組み、椅子の背もたれに深くかけたとき、あたしの体に、誰かの影が重なった。

その影は手を伸ばし、机の上の紙を手取る。

「ふーん……こんな三角関係があるなんてねエ……まさか、君の妄想とか言わないでよ？」

顔を上げると、そこにはピンクの花が胸元についたミニドレス姿のソウシが立っていた。

って、一番教えちゃいけない人物だよ！ 愛するお兄さんが作る三角関係の中心のランドさんを、排除するに決まってるよ！

「そ、ソウシっ！ 返してよ！」

手を伸ばすが、一応男子のソウシには手が届かない。

ぴよんぴよん飛んでみるが、ひよいひよいと軽くかわされる。

「……………っ……………！ うっぜえ……………」

「なんか言った？ にしてもドレスなんて、自分の外見分かってんの？」

「わかってます！ 用意されてたんだから仕方ないじゃない！」

「……………猫に小判……………いや、豚に真珠だね」

ふん、と鼻で笑うソウシに、あたしはアップパーを食らわす。

「……………ッ！？」

不意打ちを食らった彼は、無様に倒れこむ。

勝利を勝ち取ったので、ひよい、と手元から紙を奪う。

「あ。そーだ！ ソウシ、利用していい？」

満面の笑みを浮かべ、目線を合わせていうあたしに一言。

「キモい。近寄るな」

——その日、異世界から来た人を図書館に入れると悲惨な事態が起こるという都市伝説ができたらしい。

「……昨日、すごく大きい音がしてメイドが図書室に入ったら、ソウシが気を失っていたって聞いたんだけど、なんか心当たりとか、あるの？」

アシルさんの部屋で作戦会議をしていると、眉間にしわを寄せ、彼が聞いてきた。

「いえ？」

昨日と同じ満面の笑みで流すと、アシルさんは納得したように、読み物に戻った。

うーん、また読んでる、『Q、猪瀬でハンバーガーは食べれるのか?』。そんなにもしろいのか……？

「ところで、そのポケットから出ている紙はなんだい？」

指差したのは、あたしのポケットからちよっぴり飛び出ている紙。
あ、これは……。

「いえ、何でもありません！」

クシャツと丸め、背後に回そうとしたとき、ぽろ、と手から落下してしまった。

それをすかさずキャッチしたアシルさんは、あたしに取られないようにすぐさま伸ばし――、

見てしまった。

Q、三角関係はお嫌いですか？

A、ひ、昼ドラ状態の予感！

第二十の問い「三角関係はお嫌いですか？」

4

見られてしまった。
最悪な事態、発生中です。

「エマージェンシー！」

Q、三角関係はお嫌いですか？

A、いやですううっ！

あたしが書いた紙を見て、少し顔色を悪くするアシルさん。
ああ、天然の威力を使ってあたしの妄想だと思ってくれーっ！

「……保崎さん……」

目を閉じ懺悔するあたしに、うつろな目のアシルさんが聞いてくる。

「これ、本当なんだよね……」

あたしのヘタな絵を見て、手を震わせる。
なんて答えたらいいいのかわからず、あたしはとりあえずうなずいておく。

「……三角関係ということ……？」

この質問にも、目をそらしながらうなづく。

「……なんで……ジエルは昔っから、ただのいじられ役だと思っていた……」

それは、好きな子をいじめたいという小学生的思考なんじゃないですか？

そんなことを言ったら火にガソリンを入れるみたいなことになるので、飲み込んでおく。

どうしよう、これでアシルさんがランドさんをあきらめたら、あたしが彼を攻略しなければならぬ状態になってしまう……。

あたし、自慢じゃないけど、天然に萌えはするけど好かれる自信はないんだ！ あ、何キャラでも好かれぬか。一番好かれぬかはって意味ね。

って、だったら半永久的に元の世界に帰れぬえーっ！

「あの、アシルさん、まさか、あきらめたりしないですよね……？」

顔を下げたまま上げぬアシルさんに恐る恐る声をかける。

例の告白のこともあり、今、アシルさんは不利な状態だ。

この状態でランドさんを振り向かせるのは、結構難しい。

「でも、あたしに任せてください、ちゃんと両想いに——」

その途端、急に顔を上げたアシルさん。

びっくりして、あたしは半歩後ずさった。

「もういいよ」

そういつてにこりと笑った彼の目は、疲れ切っていた。

もういい——なんて、本当に思っているのか——？

「ちよつと……」

顔を下げたあたしに、びっくりとするアシルさん。

「恋愛ゲー達人のあたしに、攻略できないキャラがいるとでも思い！？」

急に高飛車な態度になったあたしに、今度はアシルさんが半歩後ずさった。

「何でもやってみるわよ！ 顔だけはいいいんだから、あたしに任せなさい！ ジエルが何よ、あんなただのビビリじゃない！ ステータス的にはアシルさんのほうが上回ってるの！ そんな弱気になるなあ！」

啖呵を切る。

その剣幕に、きょとんとしていたアシルさんだったが、やがて肩を震わせながら笑い、あたしの手を取った。

「……くす……じゃあ、頼もつかない……？ 恋愛ゲーの達人さん？」

目に浮かんだ涙をぬぐう。

うん、悲しい涙じゃなくて、笑い涙のほうで、流すんなら気持ちいいよね、見てるほうも！

「それじゃあ、一から始めよう、ランドさん攻略！」

まずは、何でジェルを好きになったのか、と、ジェルは誰のことが好きなのか、聞き出そう！

第二十の問い「三角関係はお嫌いですか？」

5

ジェル発見。

図書館の前にて、ターゲット標的確認。

いざ、出陣！

「ばああああああっ！」

「うわああああっ！？」

背後から大声を出すと、あっけなくビビるジェル君。
うーん、ヘタレにしか見えん……。

「さあ、楽しい尋問の始まりだよ……？」

Q、三角関係はお嫌いですか？

A、え？ 誰がそんなこと言った？

「さあ、ジェル君の好きな人はっ！？」

目の前には、大きな本棚、高く積み上げられた、異国語の本。
そして、お手軽サイズのライトと、かつ井。

「……な、なんでそんなこと聞くんですか……」

「だって、気になるんだもん」

唇をとがらせていうあたしは、かつ井のおいしそうな匂いに負け

る。

「食べていい？」

「別に……どうぞ……」

許可をいただいたので、早速食べ始める。
でも、目的も忘れない。

「さて、ジェル君の好きな人、暴露しちゃってよ」
「ぼ、ぼくの好きな人……」

それだけで顔を赤くするジェル君。

「も、早く言っちゃってよ。この回でいろいろ進展させるつもりなんだから。第二十の問い、どんだけ続ける気？」

「そ、そんなこと、知りませんよ……」

腰を引きながらも反論するジェル君に、あたしはキレたふりをする。
机をたたき、にらみを利かせ。気分は学校に行かない不良。

「あゝ？ 早く言えつつってんでしょ？」

これは効いたらしい。涙目で、ジェル君が答えます、答えますー！
とわめく。

……というか、みんな、恋愛してるじゃん。あたし、必要なくね？

「その……ランドさんです……僕が好きなのは……」

その途端、あたしはランドさんに、何も聞くことがなくなった。

両想いだ——……それなら、なぜ好きなのか、聞くことは、意味がない……。

何もできない、手出しができない無力さに、なんだか視界がにじんできた。

「……っ……アシルさん——……！」

部屋に入るなり、泣き出したあたしを、慌ててアシルさんが迎え入れる。

ずび、と鼻水を勢いよく吸って、あたしはさっきのことを話した。

ジェル君とランドさんが両想いなんだってということ。それから、ランドさんには何にも聞いていないということ。

それを話し終わると、今度は嗚咽が漏れてきた。

ひく、ひく、となんともまぬけな嗚咽を漏らしていると、アシルさんが、笑った。

「……な、何で笑うんですか……、本当は、泣いていいはずなんですよ……」

「いや。僕の代わりにたくさん泣いてくれたからね……ありがとう。協力に感謝するよ」

そういつて、アシルさんはあたしを抱き寄せた。

いきなりの意味不明の行動に動揺したけど、ぽんぽんと頭を叩いてくれているので、小さい子をあやす感覚なんだろう。

その気持ちに甘えて、あたしはしばらく、抱かれていた。

「……別に、あいつは逆ハー目的でここに来たんだ……おかしい光景じゃないだろう……」

動揺を隠せない様子でドアの外にるのは、レイ。

いったい何が嫌なのか、何に動揺しているのか、わけがわからない。

ただ——、ただ——、アシルの胸の中で泣いているあいつが、少し——本当に少し、かわいいと思った。

「ああもつ、どうしたんだ俺！」

それぞれの思いは、食い違う——……？

第二十の問い「三角関係はお嫌いですか？」 5（後書き）

なんだか恋愛ものって感じですよ

恋愛小説ってことを忘れていた星野です
↑

第二十一の問い「三角関係、決着つく……か？」（前書き）

今回は長いです…… ^^ ;

すみません > < 前後編に分けようと思ったんですが、第二十の問いが長引いたので……

第二十一の問い「三角関係、決着つく……か？」

結局、アシルさんは、あたしが泣きやむまで抱いていてくれた。上からしずくが垂れてきたけど、あたしは空気の読める子なので、言わないでおく。

「……それじゃあ、アシルさんは、これからどうします……？」

何とか落ち着いたあたしは、アシルさんに聞く。

「うーん……とにかく、あの二人は両想いになってほしいな」

そうだろうね。自分はあきらめるんだもん。

「にしても、女性恐怖症のジェル君が、なんでランドさんを好きになったのかな……？」

「ああ、そういえばそうだよね……」

二人で頭をひねっていると。

とんとん、と軽いノックの音がして、振り向くとつまらなそうな顔をしたシエルが立っていた。

「何二人でラブシーンやってんだと思ったら、いきなり頭ひねって……君たち、一体何やってるの？」

ちようどいい！ こいつにジェル君のこと聞こう。

「ねえねえ。ジェル君の好きな人、知ってる？」

「ランドさんでしょ。双子は自然と分かっちゃっからね」

つまらなそうに答えるシエル。
面白くない。

「じゃあ、なんで女性恐怖症なのに好きなの？」

「あいつの女性恐怖症、最初は嘘だったからだよ」

……ん？ どういうこと……？

「あいつは女性恐怖症と嘘をついて、ランドを、なぜか一緒にいる、特別な存在に仕立て上げたんだ。だけど、そのうち、本当に女性恐怖症になって……今のとおりさ」

後半、肩をすくめていうシエル。

「そ、そうなんだ……兄弟でも、気が付かなかった……」

少しショックを受けたアシルさん。
にしてもこの双子は……二人そろって小悪魔かよ……。

「あの二人、両想いなんだよなー。さっさとくつついてほしいんだけど」

「そうですよね……アシルさん……もう、強制させちゃおっかな…」

……」

えー！？ と声を上げるアシルさん。

にやりと笑い、あたしは朗らかに部屋を出て行った。

「あ、レイ」

部屋を出て少しして、あたしはレイを見つけた。

「ちょうどいいところに」

そういつて、無理やり腕をつかむ。

「はっ！？　おい、離せっ！」

「あんた、協力して」

きょんとしたレイに、あたしはいたずら笑いを浮かべた。

Q、三角関係、決着つく……か？

A、つかせる！

「ねえ……話って何？」

あたしからちょうど三メートルのところで、冷や汗をかきながら聞く、ジェル君。

「ジェル君、ランドさんのこと、好きなんですよ……？」
「え？　あーっと……えー……」

しどろもどろなジェル君に、あたしは喝。

「はっ きりしろ！」

「ま、また？　なんかデジャヴュ……す、好きだけど……？」

そういったのを確認して、あたしはある名前を呼ぶ。

「だってー。レイ、ランドさん」

ジェル君が、慌ててあたしが声をかけたほうを向く。

そこには、あきれた顔をするレイと、いつもより顔が赤いランドさん。

「あとは任せるね」

そういつて、その場を離れる。

これからどうなるかは、この二人次第だからね。

第二十二の問い「とりあえず、死んでくれないかな?」(前書き)

最近、忙しくて更新がおろそかになっています……
期末ももつすぐですし……すみません><

第二十二の問い「とりあえず、死んでくれないかな？」

ランドさんとジェル君がようやくくつついた次の日。

二人はすぐにお父さんに報告をしに行つて、数時間の討論（口げんか？）をしたのち、公認されたらしい。

あたしはその場にいなかったから、あくまでも噂だけだね。

それから、アシルさんは手伝つてくれたからと言って、あたしの逆ハ―一人目と偽つてくれた。

そのことを言った時、失礼な長男はびっくりし、ウザい三男はアシルさんのおでこに手を当て、熱がないか確認し、小悪魔――いや、閻魔様の四男はさみしいよーと言いながらあたしに抱き着いてきて、さりげなく胸のサイズを再確認し、常識人の五男は祝つてくれ、男ダイスキ、お兄様ダイスキな六男はあたしにドロップキックをかます。

そして、あたしの雷が落ちたわけだが、まあそのことは省略しよう。

とにかく今は夕方。部屋に戻ったらおやつが用意されていると思うから、部屋に戻ろう。

図書館にいたあたしはそう思い、気に入った本二、三冊を抱え、部屋を出た。

その時。

「あつ！ 保崎さま！ 待っていましたっ！」

部屋を出たあたしに歓喜の悲鳴を上げたのは、長い廊下の先までずらーっと並んだ、メイドさん、兵士さんなど、屋敷につかえてい

る人たち。

「な、なんですかっ！？ 何も悪いことはしていないと思いますけど……」

「違います、保崎さま！」

列の一番最初にいた、ポニーテールの元気そうな、あたしと同年、あるいは少し年上のメイドさんが、キラキラおめで否定をする。

「あなたはミカ……あれ？ ミテ？ うーん、ミア……？ だったかの恋を、熟しましたね！」

「……ミルさんですか……？」

「ああ、そうです！ そんな名前！」

ミルさん、よっぱど影が薄いんだな……。

そんなことを考えていると、列の二番目の、大人の色気ぷんぷんのメイドさんが言葉をつづけた。

「さらに、ランドとジェル様の恋も応援したとか！」

いや、あたしは最初、アシルさんの恋を応援していてですねエ……。

そんなことを言おうか言つまいかと考えていたら、その後ろの、三十代くらいのコックさん。

「しかも、そのお顔でアシルさまを攻略したとか！」

おい、「そのお顔で」は余計だッ！

「そう、それが一番不思議ですわ!」

また、最初のメイドさん。

その言葉はどんどん広がっていき、列に並ぶ人たちが全員、口々にそうそう、とうなずく。

ああもう……。

「……………うるっさいッ!」

腕を振り上げ思いつきり怒鳴ったあたしに、廊下はしん……と静まる。

「あたしが攻略しようがしまいが関係ないでしょ!? 相手の勝手よ! それに、あたしは好き好んであんな性悪兄弟にハーレムされたくないわよ!」

その時、あたしは、背後から出てきた一人の人物に頭を叩かれた。思いがけない襲撃にビビったあたしだが、やられたらやり返せという言葉を思い出し、後ろに向かって肘打ち。

「……………ッ!?」

すつとんきょうな叫び声を上げたのは、

「レイッ!?!? なんでいるの?」

「お前の出待ちファンがいるということを確認に来たら、また懲りなく俺たちの悪口を言っているのを聞いたから、頭を叩いてやったら、これだ」

おなかを抱えて苦笑するレイ。

少しは悪いことをしたかな……？　と思っていると。

「あ、今日のおやつはカロリーゼロのゼリーな。それ以上太ると、
屋敷が崩れそうだからな」

あたしの笑いとともに、レイの体は宙を舞った。

Q、とりあえず、死んでくれないかな？

A、うーん、いつそのことあたしが殺ってもいいんだけど。

第二十三の問い「カルチャーショックのその先で……？」

「まったく……あいつ、馬鹿じゃないのか……？」

怒ったように早歩きで廊下を颯爽とわたるレイ。

そのルックスからか、近くをすれ違うメイドが黄色い声を出す。いつもなら不愉快になることだが、今はすでに不愉快——またはそれ以上——なので、あまり気にはならなかった。

「……本当にイラつく……」

イライラと口元を下げながら、思わず心の中の感情が口からこぼれ出た。

独り言など、今まであまりなかったのだが——あいつが来てから、目立ってきた気がする。

今だってそうだ。不快な気持ちを外に吐き出した。誰かに愚痴ることでもなく。

「意味わかんねえ……」

不快ではあるが、何とも言えない感情に、いらだつ。

異世界から来た、どうでもいいただのオタクに、どうも、自分の感情を左右されている。

——言うまでもなく、レイは恋愛感情など、今まで一度も感じたことのない、恋愛初心者なのだ。

そんなレイの心境をよそに、秀名は午後のティータイムを満喫中

――。

「お、おいひいーっ！」

目の前に並べられた宝石のような一口サイズのゼリーを口に運び、あたしはほつぺたに手を当て、思わず一言。

レイを殴った後は何事もなく部屋に戻り、『カロリーゼロのゼリー』を早速食べ始めたのだけど、なんだか罪悪感――というより、後悔？

だって、一応あいつも攻略するんでしょ？　こんなに自分の高感度下げまくりじゃ、元の世界に帰るのが遅くなっちゃうよ。

軽いカルチャーショックになっているあたしには、それは結構痛い。

「……決めた。本格的に攻略しよう。まずはレイからだね。さっきのこと、謝らないと」

決意を込めた拳で机をたたくと、机の上のゼリーがプルンと揺れる。

今のあたしには、それさえも応援の形にしか見えなかった。

「よっ、レイー！」

朗らかな笑顔でノックもせずに部屋に入ってきたあたしに、レイは心底びっくりしたみたいだ。

「おま……ッ……！　何しに来たッ！？」

「うっー、折角来てやったんだよ？　少しは喜んだら？」

「どこらへんに喜ぶ要素があるというんだ、このオタク！ もう一度聞く、何しに来た」

「あたしはあんたら六人攻略しに来たんだよ？ 理由なんてわかりきってるくせに」

唇をとがらせて言うあたし。

レイは少し動揺して、「う……」とうなった。

「まあ、軽いカルチャーショックのあたしは、早く元の世界に戻りたいのだ！」

「カルチャーショック!?」

目を見開きびっくりするレイの反応に、あたしは思わず腰を浮かべる。

「なんで早く言わないんだ！ 無理にでもお父様に言って、いや、怒鳴り込んで、帰らせてもらえ！」

そこにあたしのことが嫌いだから——という感情は全くなかった。ただ単に、あたしのことが心配なんだろう。

でも、強くつかまれた手には、さすがのあたしでも動揺するぞ。

「ちよつ、レイ!? 腕、つかんでる！ 痛い痛い！」

「……ああ、すまない……」

ば、とあわてて手を振りほどくレイ。

「あたしは大丈夫だから、心配しないでね。あんな啖呵切ったんじや、戻りたくても戻れないから。あ、じゃあ、あたしもう行くねーバイなら〜」

心配させないように、わざとへらへらしながら部屋を出る。
バクバク言っている心臓は、素直だなあ……と、思いながら。

Q カルチャーショックのその先で……？

A、べ、別になんもなっていない！

「……何が心配するんだ、あの馬鹿」

第二十四の問い「恋ってなんでしょう？」

「だああああつつ!!」

ぼふん!

あたしが投げつけた枕は、豪華な部屋の壁にぶつかり、あたしのほうに戻ってきた。

ゆ、優秀な枕……!

「じゃなくて!」

顔が熱い。

焼肉とかしているときに火照る暑さではなくて、内面から吹き出してくるような暑さ。

この暑さの正体は、知らない。もちろん、原因も知らない。なので、止める方法も、知らない。

「な、なんか冷たいものでも飲もう……」

そう思ったあたしは、食堂に向かった。

「あ
あ」

二つ目のセリフは、語尾にオンプを付けた形が正しい。
こいつは忌々しい遊び人、クロード……。

いつもならだらしなく伸ばしている茶色い長髪を縛り、背中に流している。

「これから逢引^{デート}だからね。でも、秀名ちゃんとおしゃべりもしたいなあ……」

キラキラが飛んでそうな顔で、吐き気がするような甘い^{クサイ}セリフ。
あたしは横を向くと、口を押える。きっと顔は青くなっているに違いない。

「吐き気がするセリフをどーも」

「釣れないなあ……面白くないぞッ」

つまらなそうにそっぽを向いたクロード。

「別に面白くなくていいんですけど」

シャンデリアの光を受けて光っている冷蔵庫を開き、中から500ミリリットルの水を取り出す。

「いいなあ。おいしそうだね。飲み終わったら頂戴ね」

「誰があげるか、ばーか」

満面の笑みで返す。

すると、クロードが何かに気が付いたかのように、あたしに顔を近づけた。

一応クロードもイケメンだからね。ドキッします。

「なっ……何……ッ!？」

「いや、なんか顔赤いなーって」

「なんのこと!？」

知らんぷりをしよう。

水を顔の前にやり、シャットダウン。

「……………どうしたの？ そんなに顔が赤いの、もしかして、秀名ちゃん、恋しちゃったかもよ……?」

こっ……………!

より赤面したあたしの反応が面白かったのか、小さく吹き出し、クロードは「遅れちゃうからね」といって、食堂を後にした。

「……………ッ……………」

あとに残されたあたしは一人、ぺたんと床に座り込んだ。

Q、恋ってなんでしょう？

A、未知の世界です。

第二十五の問い「女装男子とは仲良くなれそうか？」

『恋しちゃったのかもよぉ？』

何回もリピートする、クロードの言葉。

「あああつ！ もういいっての！」

あたしは頭の中から奴を追い出し、水を一気に飲み干す。
もう、顔の熱さも引いている。……と、思う……。

「にしても、あたしは誰に恋をしたんだ……？」

この顔が赤くなる前にあっていた人物――。

クロードを追いつ出した頭に、新たに登場したのは、――レイ。

「ないないない！ 絶ええっ対ない！」

「うるさいんだけど」

頭を抱え振り出したあたしに一言言ったのは――。

紫色の膝丈ドレスに身を包んだ、男

女装男子、ソウシだ。

「……え、何しに来たの、ソウシ」

「何でもいいだろ。っていうか、僕の名前、気安く呼ばないでくれる？ 僕の名前は、男の人に呼んでもらうためにあるんだから」

「ただ必要のない言葉なんだ……！」

「顔に出てるよ。うざいよ」

そう言って、近くの食器棚からコップを、冷蔵庫から飲みかけのソーダのペットボトルを取り出す。

蓋を開けようと、手をかける。

「ぶぐっ……！」

どうやら、硬くて開かないようだ。

童顔の、女の人にも見える顔を真っ赤にし、気合を入れて回そうとする。

「……開かないみたいだね」

「うるさい」

「そういえば、炭酸が抜けるからってペットボトルのキャップをきつく締める人、いるよね！」

「あるあるネタ披露してないで、あける！ アシル兄さん攻略した恨み、チャラにするから！」

……こいつの恨みっていうと、夜中に藁人形持って神社に行く姿が思い浮かんでしまう……。

じ、人生の危機ッ！？

あたしはソウシからペットボトルを取り上げると、死に物狂いで回す。すると。

しゅわあっ！

ぶしゅっ！

一つ目は、蓋が開いた音。

二つ目は、ソーダが勢いよく噴出した音。

もちろん、そのソーダは噴水のように、蓋を開けたあたしと近くで覗き込んでいたソウシに降りかかる。

「……………」

ソーダを髪や服から滴せながら、お互いを見つめ合うこと、数秒。

「……………ぷっ……………！」

「……………くっ……………！」

ついにこらえきれなくなったあたしたちは、お互いを指さし、吹き出す。

「お前っ……………ソーダ降りかかってすごいことになってるよ！？あれか！？水も滴るいい男ってヤツか！？お前に一番遠い言葉だな、おいッ！」

「お前こそすごい状態だよ！服、薄い素材じゃなくてよかったな！まあ、透けてても色気のかけらなんてないんだけどな、おいッ！」

「今悪口聞こえたけど」

「それはこっちのセリフだ」

しばらく笑うのをやめ、にらみ合う。

しかし。それも持たない。ソーダ降りかかったアホな光景見て、誰が笑われずにいるんだ。

また吹き出したあたしは、お腹を抱え、倒れこむ。

汚いとかは思わなくて、ただ単純に、冷たくて気持ちよかった。

「あー……笑った笑った……」

隣でとす、と音がしてみると、すぐそばにソウシが寝転がっていた。

「……なんか知らないけど、楽しい」
「ぷっ……そうだね」

あたしたちはソーダまみれの中、何もせずに、ただ、天井を見つめながら、そうしていた――。

Q、女装男子とは仲良くなれそうか？

A、分かち合えればねエ……。

第二十六の問い「風邪はいいものか？」

「つくちゅん！」

「保崎さま？ 咳ですか？ 今までは熱だけでしたのに……」
「そ、そうみたい……」

ティッシュを取りながら、あたしはうなづく。

ソーダ事件から一日。すぐに着替えてお風呂に入ったものの、やっぱり風邪を引いたらしく……。

赤い顔は、恋とやらのせいではなさそうです……くっちゅん！

「ほらほら、仮にも女の人が鼻水たらすとはどういうことですか」

なんだか暴言が聞こえた気がする。

しかし、このメイドは人の話を聞かないタイプらしい。ベツトに入っているあたしを無理やり起こして、鼻にティッシュを当てる。

「はい、ずびー」

「……………」

冷めた目で、メイドを見る。

「どうしました？ 保崎さま」

「ずびーはないでしょう、ずびーはッ！」

「仕方のないことです！ ほら、抗わないでください、ティッシュがずれてしまいます！」

ああもうッ！

「治りましたッ！」

あたしはベットから飛び降り、服を着替える。

「保崎さま!？」

「もういいです、大丈夫です、お構いなく！」

大きな音を立ててドアを閉め、あたしは部屋を後にした。

「……………ッ、なんだお前、どうし——」

「ゴメン、レイ。かくまわせて」

その時、廊下から「保崎さまー!？」という声が聞こえる。

「何したんだ、お前!？」

「何でもいいじゃん、あ、このクローゼットいい」

有無を言わずに、あたしはクローゼットの中に入る。

「おい、馬鹿出るッ！」

レイが腕を引っ張る。

このまま見つかったら、クローゼットの中に何かあると感づかれる！

「ああもうっ！」

レイの腕を、思いつき引き張った。

ばんっ！

「レイ様、保崎さまを知りませんか……あれ……？」

メイドの目に映ったのは、きちんと整理整頓がされた、いつもの見慣れた部屋。

そこには、レイも秀名もいない。

「……おかしいですね……レイ様までいないとは……」

首をひねりながらも、メイドが部屋のドアを閉めた。

「……………アホか……ッ！」

数十秒後、クローゼットからどび出したのは、レイと、秀名。

「勝手に人の部屋に押し込んで、何やってんだ、アホ！」

「いやだつてえ……」

「言い訳をするな、言い訳をッ！　ったく……そのクローゼットはようやくひとり入れる大きさなんだぞ……押し込んで……おし……」

レイが顔を赤くする。

そんなに密着してたかなあ？

「まあ、ばれなかったから結果オーライ」

「よくないだろう！」

「うるさい五月蠅い。じゃああたしはここにとどまることにしよう。」

ちよつとの間だから」

その途端、レイの顔がもつと赤く。

「……？ どうした——」

「うるさい自分の部屋に戻れ——！」

押し出されました……。

Q、風邪はいいものか？

A、よくないっしょ……。

第二十七の問い「まさか、惚れられたか……？」

「……ったく、追い出すなんてひどいよね。うん、ひどい。さすが冷血人間。っていうか誰かに愚痴りたいー！ 誰かー！」

悲観的な声を上げながら、あたしは廊下を歩いていきます。

あのメイドさんには見つかって、みっちりお説教されたよ！ レイのせいだ！

とにかく、風邪が治ったので、イライラしながら廊下を歩いていきます……！

「誰か……あたしの知り合い……！」

その時。

「あ、秀名さん。こんにちはー！」

語尾にオンプが付きそうな言葉を発してくる、ブロンドのツインテールメイド。

こいつは、ミルさん——！ あたしがくっつけてやった、もっとも爆発してほしいリア充だ。

いいカモを見つけた、と表情に出してしまった。

「……そ、それでは失礼します」

お辞儀をし、すぐにその場を立ち去ろうとするミルさん。

その手をがしりとつかみ、あたしは彼女の口を押えながら自分の部屋に引きずり込んだ。

「それって、惚れられたんじゃないですかー？」

嫌がっていたミルさんだが、さっきまでの態度が嘘のように楽しんでいる。

にしても……惚れられたって……ッ！！？

「言葉通りですよ。惚れられたんじゃないですか？　って」

「でも、あいつはいつも通りに毒を吐いて、部屋から追い出したんだよ？　好きな女性^{ヒト}に行う行為とは思えない」

「照れ隠しってやつですよ。オトコゴコロって複雑怪奇ですしー」

あたしの反応を見て面白がったのか、にやりと意地の悪そうな笑みを浮かべて、ミルさんが言う。

「で……でも……」

「もう、いいんじゃないですか？　好きってことでー。で？　秀名さんはどうなんですか？」

顔を近づけてきたミルさん。

きれいなブロンスの髪が、さらりと揺れる。

「あ………たし……？」

「そうですよー！　秀名さんはレイ様のこと、どう思っているんですかー？」

あたしがレイのこと……ッ！？

うーん、頭の中に流れるのは、今までに言われた悪口集。

『お前にドレスなんか、もったいないな。豚の着ぐるみでもよかつたんだぞ？ お似合いで』――

『論外だ、論外。早く帰れ』――

『それ以上太ると、屋敷が崩れそうだからな』――

「論外ですよおっ！」

「わわ、どうしました？」

惚れるのも、惚れられるのも論外！

「ないないない、絶対ないです！」

首を振ったあたしに、びっくりしたミルさん。

「え……本当にないんですか……？」

「うん！ 断言する！ あたしとあいつに恋愛感情など生まれないと――！」

Q まさか、惚れられたか……？

A、ないないないないない！！！！！！

第二十八の問い「協力者」と書いて、何と読むんですか？」

「いやあ……面白いことになってきたようだねエ」

秀名の部屋の外で立ち聞きをしているクロードの影。

その近くで、不思議そうな顔をしているシエルがクロードの背中につかまる。

「納得いかない……あの容姿でよく攻略できるんですね……」

「おやあ？ 第二のソウシ？」

「違う……！」

叫ぼうとして、部屋に聞こえると思ったシエルが、口をふさぐ。

「こいつがねえ……意外にじゃないですか」

「そう？ そんな意外じゃなかったけどー」

にこやかな笑顔を見せたクロードに、シエルは怪訝そうな顔。

「兄様の考えていること、よくわかりません……」

「まあまあ。僕たちは応援役にでもまわってあげようじゃないか」

「応援って……あの二人のですか……？」

「それもあるけどねエー。あと一人、ね」

何かをたくらんでいる悪戯っ子の瞳をしたクロードが、ある部屋に向かった。

Q “協力者”と書いて、何と読むんですか？

A、おせっかい 面白がっている協力者、協力者と読む。

クロードが叩いたのは、ある人のドアだ。

ノックの音で誰が来たのかわかったのか、軽やかな「入ってくださーい」という声がする。

語尾にハートマークをつけてもよさそうなその声に、シエルは顔をしかめる。

隣のクロードは別に何も気にしていないのか、いつもの笑顔で部屋に入る。

「どうしました？ お兄様」

例のメイド服ロリータに身を包んだ弟が、高価な椅子に座って、麗しい笑顔を向ける。

「いや？ 特にこれといったことではないんだけどねー」

そついいながら、クロードは弟——ソウシの正面に座る。それを見たシエルが、警戒をしながらも兄の隣に座る。

「何か重大なことですか？ それとも、本当にこれといったことではないのですか？」

今日の髪ウィングの黒髪を垂らしながら、首をかしげるソウシ。正直、そこら辺の女子よりはかわいいだろう。

「あのね、男時のほうが話しやすいんだけど……」

少し動揺しながらクロードは頼み込む。

すると、しぶしぶだが、「お兄様がそいつのなら……」と言って、本棚の陰に隠れて着替え始める。

待つこと数十秒。メイクを落とし、服も着替えた男時の弟が現れた。

「……それで……話というのは……」

自分の服装を顔をしかめ見おろしながら、ソウシが訊ねる。

「一方的な報告みたいなものなんだけどね。レイが、秀名ちゃんに惚れちゃったみたいでー」

その途端――。

「はあ……?」

空気が凍り付いた。

背後で、ぴきーんだかびきーんという音がするのを、シエルは確かに聞き取った。

「なんですか、それは……」

髪が上がりかねない弟のオーラに危機を感じたシエルは、思わずクロードの腕を取り、退散した。

部屋の外に出ると、弟のホモっぷりにあきれてきた。

「……なんでそんなに怒れるんでしょうかね……あいつは……」

「……あいつがその時思い浮かべたのは、一体どっちなんだろうね」

自分の質問を無視してつぶやいたクロードに、シエルは首をかしげた。

第二十九の問い「まさかの関係ってなんですか？」

「あ」

「あ」

なんだか聞き覚えのあるようなセリフ。

って、それより問題。ソウシにばったりとあってしまった。
しかも、元^{男時}の姿で。

「……………ど、どうしたの……………」

いつもならメイクの下に隠れているであろう男らしい顔つき。それでもやっぱり童顔の女顔に見えるが、何も言われずに女性が男性かと聞かれたら、迷わず男性というであろう。

服装だって紳士服だ。女装時のきらびやかなドレスしか見ていないから、違和感はあるが、普通のイケメンと言えるだろう。

そんな奴に少しどきまぎしながら聞くと、ソウシは唇を尖らせ、

「僕も一応男だからね。男性と会う予定のないときは、時々男^{すっぴん}になるんだ」

「ふーん。……………いつも女装なんてしなきゃいいのに。かつこいいよ？」

あたしの言葉に、ソウシは顔を赤くする。

「よっ……………、よくまあそんな恥ずかしいことがいえるね……………ッ！」

いったいなぜそんな反応をするのかわからないが、とりあえず謝

っとおこう。

「え……？　「ごめん？」」

「もういいよ、早くどっか行けー！」

え、なんかキレられた……？

まあいいや。ちよちよつと図書館に行く予定だったし。早く帰ってこようとか思っていたし。

「じゃあねー」

わざと不機嫌そうな声をだし、あたしは図書館に向かった。

「……いや……なんでだ……？」

秀名が廊下の向こうに消えて行ったのを確認し、ソウシはへなへなっと、座り込んだ。

あのソーダ事件があつてから、どうもあいつといると調子が狂う。自分ではなんだかわからなかったが、さっき、クロードに言われた言葉で、妙な反応をしてしまったことから、気が付いた。

……………認めたくないのだが。

「……俺、意外と正直者なんだなー……」

男性が好きだと気が付いてから消え去った一人称が出てきた。女装時は一人称を「僕」にしているが、男時ではつい「俺」が出てきてしまう。

だが、今の一人称は、明らかにあいつのせいで出たのであろう。

「いや、そんなことない……あいつのせいじゃない……自分の勝手で……」

つい何日か前はムカついていただけの相手。それが、こんな簡単に気持ちひっくり返ってしまう。

「レイお兄様は……どう思っているんだ……？」

そんなことをつぶやいたのは、認めたからだ、と思った。

Q、まさかの関係ってなんですか？

A、いやあ……そりゃねエ……。

「お兄様。レイお兄様」

次の日の朝早く。ソウシは普通の姿でレイの部屋をノックした。朝早いのは、誰かに立ち聞きでもされたら困ると思ったからだ。

「……入っていいぞ……」

さすがのレイでも朝は弱いらしい。だるそうな声が聞こえる。だが、訪問者が警戒すべき相手だとわかったのか、ぴりぴりとした雰囲気を感じとられた。

「入ります」

ゆっくりと、ソウシは部屋のドアを開けた。

第三十の問い「何やら雲行きは怪しい……?」

「こんな朝早くから、どうしたんだ?」

レイが、男時のソウシを見て、目を見開く。

そんな反応を面白がりながら、ソウシは目的を思い出した。

「保崎 秀名のことです」

名前を出すだけで顔を赤くする兄の反応を見て、ソウシは確信した。

「その反応——やはり、お兄様は保崎 秀名のことか——」

「ちっ、違うッ!」

赤くなった顔を隠すために後ろを向いたレイは、慌てて顔を抑える。

「断じて違う! 俺はあんなオタクなんかに恋愛感情など——」

「ほばばらしていますよ。わかりやすいですね……」

「……仮に、仮にだぞ、俺があいつに特別な感情を持っていたとして、ソウシ——お前はと思うんだ?」

顔を抑えながら上目づかいにこちらをうかがうレイ。

前までなら完璧に襲っていたであろう。

「宣戦布告します」

今までの会話全スルーでソウシが切り上げた。

びしりと突き上げた、白く細い人差し指は、しっかりとレイをとらえている。

「……宣戦……？」

きょとんとした顔でこちらを見てくるレイ。
ソウシはこくりとうなずき、指を下した。

「僕——いや、俺は、本気であいつを攻略する。恋敵^{ライバル}がお兄様だろうか関係ない。……か、覚悟しとけよっ！」

初めて愛するお兄様^{男性}に啖呵を切ったソウシは、語尾が震える。

「………っっていうか俺、あいつのこと好きなのか……？」

いまだにわからないレイの一言が、嵐の去った後のような静かな部屋に響いた。

Q、何やら雲行きは怪しい……？

A、……あたし的には……。

「なんだろうか……視線を感じる……」

久しぶりにアシルさんの部屋に言ったあたしは、最近感じている妖しい視線のことについて相談してみた。
すると、アシルさんは眉間にしわを寄せ、真剣な表情をした。

「……それは大変だね…… お屋敷に不審者が侵入でもしたのかな……
あまり考えられないけど…… でも万が一ってこともあるし…… お
父様に相談しておこうか？」

なんだか久しぶりに聞いたようなまじめな返信に、あたしは感動
して目を潤ませる。

「……ッ、どうしたの？」

「いやあ、最近悪口しか言わない性悪人間しか相手にしていなかつ
たから、まともな意見を聞けたのに嬉しくて……」

あたし的にはものすごく感動したのに、アシルさんはプツと吹き
出した。

な、なんてひどい反応……！

「ひどいです！ あたしは真剣なのに……」

「ごめんごめん。……ぶっ……」

もうおさまらなさそうなアシルさんにあたしは少し睨み、相談の
内容に戻る。

「で……視線つて、なんだと思いますか？」

「……あれじゃない？ 秀名ちゃんに惚れちゃった兄弟たち」

その答えに、あたしは吹き出す。

「ないないないですって！ そんなことあつたらあたしは美少女に
なりますよ！」

「たとえばよくわからないけど……考えられないか……」

少しショックを受けたようなアシルさん。
自分の意見が外れたのがそんな悔しいか？

「じゃあ、ほかの考えは……………ない、ね」

少し間をおいて断言したアシルさんに、あたしは小さく舌打ちをした。

第三十一の問い「協力者(?)の存在明らかに……?」

「おっにいさま」

語尾に星がついてもおかしくない言葉を発したのは、シエル。
そしてその顔はレイのほうに向いている。

「なんだ」

つんつんとした言葉を返すと、つれないなあ、と唇を尖らせるシエル。

「まあいいや。お兄様、保崎——」

まだ言葉の先はあるのに。レイはシエルの口を押えた。
思わぬ反応に、びっくりするシエル。

「なっ、なんですかお兄様!」

「あまりこんなところであいつの名前を出すな!」

「こんなところって、廊下ですけど」

「廊下でも誰かが聞くことはありうるんだよ」

ははーん、と笑うシエル。

「そんなに聞かれたくないんですか? あいつのこと」

「いや、ちちち、違う!」

もつばれてますけど、というと、意外にあっさりレイは折れた。

「……で？ お前は俺に何がしたい」

横を向き、顔を赤くして言うシエルは懷から何かをとしだす。
それに気が付いたレイは、思わず言う。

「おい待て。何を取り出そうとしている」

「え？ カメラですけど」

そういつつ慣れた手つきでカメラを取り出す。
慣れている手つき、ということはこれが初めてではないらしい。

「なぜ……なぜカメラ……」

もう答えはほぼわかっているが、一応聞いてみる。

「いや？ お兄様のそんな恥ずかしがっている顔、女性にはもちろん男性にも言い値で売れるかなあー？ と思ったもので」
「男性にも売れるってなんだあああ！」

とりあえず叫んで、カメラを没収しようとする。
しかし。悪事的にはシエルのほうが一枚上手だ。するりするりと攻撃をかわされ、ついにはシャッターを――。

かしやり。

切られた。

「……売れますね、売れますこれ！」

取れた画像を確認し、さらには画面をレイに向けどうかと聞いて

くる。

「売れなくていい！ 消去しろ！」

「だあ、もうとらないうでください！ これ結構高かったんですから！」

またもや伸ばした手をするりとかわされる。

すると、シエルが「じゃあ、」と切り出してきた。

「保崎秀名攻略を手伝いますから、売らしてください」

「だめにきまつているだろおお！」

即答されたので、シエルはちえ、と舌打ち。

「まあ、本人の同意なしでも手伝いますし、この写真だつて売りま
すがねー」

「さっきの約束意味なしだよ！」

走り出したシエルを追いかけて、レイはツッコんだ。

Q、協力者（？）の存在明らかに……？

A、本人は嫌がってたけどね。

第三十二の問い「紅茶のお供にいかがでしょう？」

「コイバナなら聞かないよ？」

「違う」

クロードの部屋に、レイがやってきた。

彼の片手には菓子折り（？）のクッキーの缶だ。

「まあ、座つてよ。何の用かな？」

目の前の椅子を手で指され、レイは座る。

椅子とセットのテーブルにクッキーの缶を置き、隣に置いてあった紅茶のカップを上からのぞいてみる。

中身は入っていない。

「……飲みたい？」

「あ、まあ……」

「じゃあ、入れてくるね。そのお話は、『Q、紅茶のお供にいかがでしょう？』」

何もわかっていない様子のレイは、首をひねった。

Q、紅茶のお供にいかがでしょう？

A、あいつ、わかってないみたいだけど……。

こぼこぼと音を立ててカップに注がれる液体を見て、クロードが切り出す。

「で？ 何の用？ レイが自分から訪ねてくるなんて珍しいね。僕がレイの部屋に行くのはよくあるけど」

「押しかけているだけですよね」

「まあまあ」

紅茶がカップにすべて注がれたので、クロードがレイのほうに差し出す。

「ありがとうございます」

湯気を立てている紅茶の熱さにすこしビビりながらも、一口飲む。ストレートの紅茶はあまり飲んでいなかったが、ミルクを入れるよりもおいしいと思った。

「それで、そろそろ話し始めてほしいなあー。ことごとくスルーされてるからー」

自分もカップを持ったクロードが、にこりとしていう。

「あ……コイバナ……？ 的な話ですが」

最初に断られた話題だったので控えめに言うと、以外にもクロードは笑顔で聞く体勢に入った。

「保崎秀名……って、どうやったら攻略できると思いますか？」

「知らないーい」

そっけない態度で返されたので、レイは思わず紅茶を吹き出した。

「……えっ！？ お兄様のことから、『ああ、いいよー。まずは夜と一緒に過ごそうね』くらいは言われる覚悟だったんですけど……」

「言われたら君はどうする気だったんだよ……っというか、僕はそこまで協力しないよ。自分で考えなさい」

そっけない態度のクロードに、レイは上目づかいで聞く。

「ど、どうしてですか……？」

「まあ、ぼくもシエル君に協力者になろうと相談したけどね。そこまで協力はしない。僕がする範囲は、^{ラブレター}恋文を渡したり、偶然を装い二人を合わせるくらいだよ。そこら辺の境界線、わかってる？」

問いかけたクロードに、レイはふるふると首を振った。

「どうやら、彼にはまだ早い話だったらしい。」

「……経験値、君低いんだっただよね……」

ため息をついたクロードの紅茶に、レイは慌てておかわりを注いだ。

第三十二の問「紅茶のお供にいかがでしょう?」(後書き)

最近、兄のせいでPCの使用時間が三十分〜一時間になっています
>
<

なので、更新はまばらになると思います……

第三十三の問い「女装男子と冷血人間は好き？」（前書き）

ウェブ拍手のお礼ページに、たまにですが秀名のイラストが出てきます^^;;

絵は私が書いたのでうまさは保証できません↑

第三十三の問い「女装男子と冷血人間は好き？」

「久しぶりにやってきました秀名一人称の回ーっ！」

自分の部屋のベッドの上で、あたしはこぶしをぐつと突き上げた。もう何回ぶり？ 一回三人称でやって、あ、行けんじゃんなノリで何回やったんだよ、作者！！

とにかく、自分のターンが回ってきたみたいでうれしいっす、マジで！

「ああー、久しぶりすぎて自分のキャラ見失った！ どうしてくれるのよ作者」

語尾の上がったセリフを言うあたし、もはやテンションハイだー！

……いや……。

「……………」

あたしは急にドアのほうを振り向く。

しばらくそうしたうち、何も起きないのを確認し、ほっと胸をなでおろす。

「いつもならこうしてあたしが変な行動をしたときに誰かが入ってくるんだよね、レディのお部屋なんだからノックくらいしてほしいんだけど」

ぶつぶつと文句を言っていると、ちょんちょん、と肩をたたかれた。

……この作者は……毎度毎度同じパターンで……。

「はい!?!」

思いつきり嫌そうな声を発したあたしは、後ろを振り向く。
すると。

ぷにゅっ。

「はははー、引つかかったー」

ほっぺに指が突き刺さる。

あたしが睨んだ先には、クロード。

へへへー、とでも言いたげなその顔に、あたしは仏頂面。

「……何の用ですか……?」

「やだなー、デートの時間を削って来てやったというのにー。秀名ちゃん、まさかツンデレ? はたまた冷血キヤラ?」

「両方違いますッ! あたしはただのオタクです!」

オタクを堂々といふかなー? と腕を組みながら苦笑いしたクロードに、あたしは言うんです、と反撃。

「とにかく、用がないなら帰ってくださいよー。あたしも暇じゃないんです」

ぐいぐいとクロードさんの背中を押しながら文句を言う。
すると、クロードさんがドアの陰に向かって、

「だってよ?」

「……………」

長身のクロードさんの後ろから、つま先立ちになってその先を見る。

すると、そこには何やら二人の人物。

「……………レイ……………？ ソウシ……………」

不機嫌そうな顔で床をにらみつけるソウシと、今にも逃げようとするレイ。

ありそうでなかった組み合わせに、あたしはきよんとする。

「どうしたの？ まさか頭撃った？ それとも乙女ゲーやりたいの？」

「なんでそんな考えにつくかな……………？ ただお話に來ただけだよ。きっと」

不自然に“きっと”を強調したクロード。

そしてそのまま逃げるように走って行った。

「……………」

何をしに來たのか目的が全く分からないあたしは、ただその場に立ちすくんでいるだけだった……………。

……………それは、あの二人も同じだったけど……………。

Q 女装男子と冷血人間は好き？

A、
……それ、
答えなきゃダメ？

第三十四の問い「この雰囲気、何とかありませんかねエ……？」

前回までのお話っ！

あたしの部屋に、急に女たらしの長男がやってきて、あたしをからかった後、冷血人間レイの三男と女装男子ソウシの六男を置いて、自分はさっさと帰りやがったよ！

さてさて、残されたあたしたちはどうするのか――……。

「……って、やってらんないわよ！」

突然怒り出したあたしに、二人はびくつとする。

「ど、どうし――」

「ありえない、ジェル君とかアシルさんとか、結構話が保つ……いや、仲がいいヒトだったらともかく、なんでこの二人！？ 嫌がらせの上でのこの組み合わせ！？」

「そんなにキレても仕方がないし、とにかく部屋に上がらせてよ。これはレイお兄様も思っていると思うよ！」

「誰が入れるか。部屋にマンガース入れるのと一緒にだよ！」

「こんなにかわいいマンガースどこにいるんだよ！……あ、今女装してないんだった」

自分の服を見おろし、少し残念そうに言うソウシ。

そんなに男時がかつこよくないわけでもないし、なんで残念そうなんだろう……？

ソウシがパッケージにいる乙女ゲーは絶対買っね、うん。

「おい自分を乙女ゲーのキャラクターに例えられたぞっ！ それはさすがにうれしくない！」

「いいじゃん、あたしにとっての最高の褒め言葉」

「うそだろそれ！ 視線泳いでるぞお前！ クロールでもしてみるか！？」

「いいよいいよ、クロール」

ゆらゆらと特殊な目の動きをする。

いい出来だと思ったけど、睨まれる。

「ふざけてるのか……？」

「お前に頼まれてやったんじゃない、元凶はソウシ！」

「……あのー……ちよつといいか？」

突然手を上げたレイ。

……ちよつと存在忘れてた。

「そういえば、レイって最近冷血人間っていうより、空回りしてるかわいそうなキャラに成り上がったよね」

「それは成り下がったという」

「そうかなー……？」

楽しそうに（少なくともあたしは）会話をするあたしとレイに、ソウシはふきげんそうな顔。

「……保崎 秀名。部屋に上がらせろよ」

うぐっ……。ついに来たよ……。

「まあいいよ……その代り早く帰ってね」

ため息をつきながら、あたしは部屋の中に入った。

そのあとから、二人が申し訳ないという感情を見せずについてくる。

……一応部屋の中に女子といるんだし、ちょっとぐらいはどぎまぎしてくれたっていいんじゃない？

「……わっ!？」

そんなことを思っていると、レイがちょっとした段差に躓く。すてーんと、確かにそんな音がして、頭から落下。

……こんなこと言っているのかわからないけど……ダサイ。

「レイ………」

一気に空気がシラケた……。

あたしはとりあえず、レイに手を差し伸べ、立ち上がる手助け。

「……あ、ありがと………」

その時、隣から手が伸びてきて、レイが少しだけ伸ばした手をチョップ。

……痛そう……。

「レイお兄様？ 大丈夫ですか？」

そういつて、ソウシは自分の手を差し伸べる。

愛しのお兄様にあたしを触らせないの考えか……でも、だったらあたしの手にチョップするでしょ。なぜレイにチョップ……？

「あ、ああ……平気だ」

ソウシの手を借りずに立ち上がるレイ。
そして、あたしのほうを振り向き、

「ありがとう——」

「レイお兄様？」

お礼を言う前にソウシに邪魔をされる。

お前ッ……！ と絞りだすような声で怒るレイ。

「あのー……？ 完璧に空気悪くなりましたよねー……？」

Q、この雰囲気、何とかありませんかねエ……？

A、もう無理だ。

間に火花を散らすレイとソウシ。

その二人を見ていたら、なんだか気づかぬうちに頭を抱えていました……。

第三十五の問い「恋敵って、あたしが……？　ですかっ！？」

「……にしても、どうしたの？　なんだか今までとは違う雰囲気が悪さだよ。どうしちゃったの？」

「別に。お前には関係ない」

そっけなく言ったレイにあたしが「なーんーでー！？」と連発すると、

「うーん、これは僕とお兄様の問題だけど、君にも関係あるようなでもないようなやつぱりあるかもしれないけどそれは嘘かもしれないなくてっていうか嘘でもそれは本当に嘘かもしれないというのが嘘でもそも僕は嘘についていなくて君が勝手に……」

つらつらと機械のように言うソウシを、あたしは止める。

「だあーっ！　もういいーっ！　やめれーっ！」

「嘘だつて決めつけるから僕はそれでも本当に嘘だからその反対とかなんてなくて……」

「ソウシ。もういいだろ……」

げっそりとしたレイがソウシを止める。

ほっとしてため息を吐いたら、屋敷にある大きな時計が三時を告げた。

おやつの時間だ。

「と、とにかく何か食べて落ち着こう！　ほら、三時だし！」

かちやりとドアの開くがしたので、あたしはドアに走って行った。

今日はなんだろうな……。――

べふっ！？

「……………」

いきなり飛んできたパイ。

オタクに運動神経なんか求めちゃいけないよ？　もちろんよけき
れずに顔にヒットしたからね。

いつもなら大好きなクリームは豪華なドレスにも模様を描き、さ
らには床、あたしの後ろにまで吹っ飛び、少し前にいたらレイとソ
ウシにも被害が加わっていただろう……。

「ぱ、パイ投げ…………？」

半信半疑の口調で、レイが状況確認する。

……………もうそれしか考えられないだろ…………。

ずるずるとクリームが下がってきたので、手で取って視界を開け
る。

メイドさんだ。

おそらくパイが持っていたであろう紙皿を片手に持ち、むんつと
唇の端を下げた明るい色の髪を背中中央までおろした、あたしよ
り二、三歳年上の女性。

「…………ツツユアネーム…………？」

英語で聞いたあたしにツツコみもせずに、そのメイドさんは怒鳴
った。

「あたしはウォンチ。あなたが保崎 秀名ね。レイ様に近づかないでー!」

一方的に言って、メイドさん——いや、ウォンチさんは去って行った。

Q、恋敵って、あたしが……？ ですかあ!?

A、波乱の予感だよね……。

とりあえず、残されたあたしはバスルームに急ぐ。

走るとクリームが飛び散りそうだから、慎重に、歩いて、そろそろと……。

「……レイお兄様、ウォンチ、とは……?」

「さあ。聞いたことはあるが、実際に会う……? のはあれが初めてだ」

困ったようにレイが首をひねったのを、あたしは不思議そうに見た。

意外とモテるんだな……。

………っは、どうでもいいけどね! あたしには関係ない!!

第三十六の問い「絶対謝りませんからね！　と言われても……？」

「ほんつとくに申し訳ありませんでした！！」

「いや、もういいですって」

「いいわけありません！　なんとお詫び申したら良いのか……ほら、ウオンチ、謝りなさい」

ぼつてりとした体系のメイドさんが、目の前にいるウオンチさんの頭を押さえ、ぐいと下げる。

ウオンチさんは少し抵抗したが、メイドさんの力が意外と強かったらしく、しぶしぶ下げた。

「いいですよ……ほら、お風呂に入ったら落ちましたし、雑巾でこすったら床だってピカピカになりましたから」

濡れた髪をとかしながら——なんてことはないが、とにかく寒いので髪をぱんぱんとタオルで乾かしながら、あたしはクリームが落ちた、元はピカピカの床を指さす。

「そういう問題じゃないんだろ」

腰に手を当て、ため息をつくレイ。

その隣でソウシがうんうんとうなずいている。

「……だって、床が無事なら大丈夫じゃん。あたしは別に、慣れっこだし」

「慣れっこって……おまえ、まさかいじめられていた過去が……？」

「あるわけないじゃん！　あたしはいつでも傍観者。っていうかみんなあたしに近づいてこなかったんだよねー。なんでだろうねー？」

首を傾げたあたしに、レイは聞く。

「お前、どんな様子だったんだ？」

「え？ ただボーっとしてただけだよ？ まあ、『お前らウザいからあたしに近づくなオーラ』は出してたけど」

それがいけないんだよ、とレイが怒鳴る。

すると、その言葉を遮るように、ウォンチさんが手を上げた。

「つていうか、謝るのは本人がいいと言っているから、いいんじゃないんじゃありませんか？」

「よくない！！」

「よくないだろ！！」

血相を変えてウォンチさんに反論した二人。

あたしはその後ろでびつくりと、呆然として立っている。

「パイ投げはないだろう、パイ投げは！！ クリームが飛び散るのを予想しなかったのか、お前は！！」

レイに怒鳴られ、ウォンチさんはほう……、と顔を赤く染める。

「……M……？」

「違います。あなたには一生分からの感情です」
「……？」

眉間にしわを寄せたあたしに、ウォンチさんはふん、と顔をそむけた。

あたしは助けを求めるように、ソウシのほうを向く。

振り向かれたソウシは少し困っていたけど、そのうちそむけられた。

「……みんないじわる」

不機嫌。

その途端、レイとソウシがあわてて弁解。

「いや、それは……」

「実はな、俺ら……」

ばしっ。

右ほおに強烈な痛み。

見てみると、怒った顔のウォンチさんが平手打ちをし終わった手の形。

「……なんですか……？」

涙目で、平手打ちを食らった頬を押えながら言うと、レイとソウシも「そうだそうだ！」と加勢。

意味わからん……。

「……レイ様のばあか！ 絶対謝りませんからねー！」

泣きながら、部屋を飛び出していきました……。

Q、絶対謝りませんかからね！ と言われても……？

A、困るだけだよねえ……痛いし……。

第三十七の問い「ダンスパーティーに向けて……大丈夫か？」

「ダンスパーティー！？」

赤くはれた頬に湿布を張ってもらいながら、あたしはメイドさんに聞き返した。

行き成り動いたのだから外れたらしく、不機嫌そうに「そうです」とぼつさり切り捨てられる。

「クロード様から聞いておりませんか？ 言いだしつぺはあの人ですよ？」

ずれた湿布をピリピリとはがしながら不思議そうに聞く。

そんな聞いてないよ……って、痛い痛い痛い！！

「強くひっぱらないくださいよー！」

「保崎さまが行き成り動いたのが悪いのです。ほら、こっち向いていると一気にはがしますよ？」

そついわれると困る。

あたしはいい姿勢で正面を向く。

「……それで……あたし、ダンスなんてできませんよ？」

「あら、大丈夫ですよ。クロード様が教えてくださるですよ。」

さあ、これを貼り終わったら廊下で待っているレイ様、ソウシ様と一緒に三階のダンスレクレーション室に向かってください」

その言葉がいい終わらないうちに、メイドさんは湿布を貼り終えた。

「さあ、早く行ってください」

ついでにはれた頬をぴしりと叩く。
きいん、と強烈な痛みが体中をめぐる。

「いったああああ——！？」

思わず悲鳴が口の間からこぼれ出ていた。

「はぁーい。みんな集まった？　じゃあ出席でもとろうか。ダンス音痴のレイ」

「ああ！？」

「女の人のパートしかやったことがないソウシ」

「それを言うなあ！」

「初心者 of 秀名ちゃん」

「はぁーい……」

何ともやる気のなさそうな声。
でもあたしだけではないみたいだ。ちょっとほっ。

にしても、ダンスルームって言われたから鏡張りのお部屋かと思っただけ、意外とふつうのお部屋。

「うん。もとはただの部屋だったからね。一つ空いてたから、そのまま使わせてもらうことにした」

あっけらかんとしているクロード。

「ふうん。で？ ダンスって？ 社交ダンスでしょ？ くるくる回ってばあーって感じしかないんだけど……」

その途端。

クロードが思いきり突き出した人差し指が、あたしの顔ぎりぎりに飛んできた。

「！？ ちょっ、何！？」

「意外とハードなんだよ！ さあ、練習開始」

なぜか熱血モードに入ってたクロードを、あたしは不思議そうに見つめた……。

Q、ダンスパーティーに向けて……大丈夫か？

A、……わかんない……。

「参加します！！」

入口のところで声がした。

見ると、動きやすそうな服に着替えた、——ウオンチさん。

「教えてください！ 是非！」

気合十分なウオンチさん。

そんな彼女は、クロードでも止められなかった。

第三十七の問い「ダンスパーティーに向けて……大丈夫か？」（後書き）

明日から冬期講習で、更新できないかもしれないです><
ごめんなさい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7429x/>

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

2011年12月25日20時47分発行